

友の中



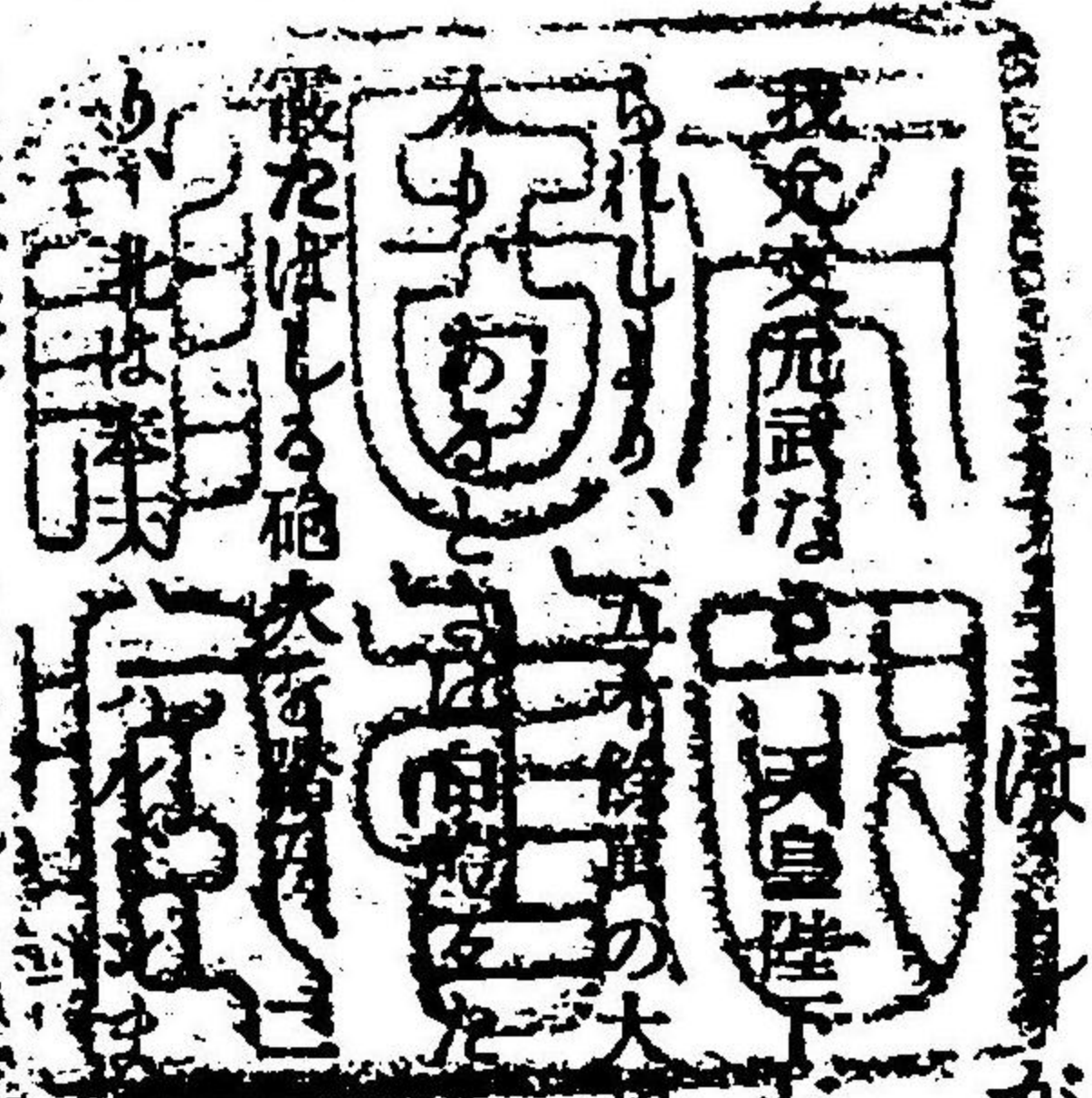
株式會社  
中外圖書發行

21  
78

2221-789

特 25  
125

友 の 中 陣



がき

我々先帝陛下が、かの頑迷不遜なる露國に對して、宣戰の大詔を降せしめ、虎や住むてふ滿洲の荒野に、  
大和武夫は、遙けき海を渡りて、あるときは膚をやくの山嶽に  
雪中に千仞の怒濤を冒し、  
最たはしる砲火を踏み、二年の長き、梳風沐雨の困難に打勝たれて、今や南は旅順よ  
り北は奉天まで、なべて旭旗のひらめかぬところ無きに至りぬるは、誠  
に喜ぶべきことにして、これ偏に我 天皇陛下の御稜威と、遠征將士の忠勇とに外なら  
ず、國民たるもの、あらん限りの熱誠を捧げて感謝すべきとにぞある。

各地に於る祝捷會、提灯行列、旗行列、あるはまた出征者家族の保護、慰勞義會、恤  
兵義會、後援會などいとも盛なる出征者の送迎と共に、都鄙至るところに於る萬歳の聲  
は、實に國民熱誠の溢るゝ處にして、些か遺憾なけれども、陣中慰勞の一段に至りて  
はしがき

明治 80  
88  
内交

は、物足らぬ心地をする。

遮莫家郷憶遠征と不識庵の述懐は、昔しも今もかはらぬ陣中の至情なるべし、一個の慰問袋は幾十日の語り種となり、一冊の雑誌は幾百人の手に縋かれ、<sup>三</sup>一片の端書、一葉の新聞紙すら幾人の手にうつり、果ては身につけて放さぬとか聞く、これまことに露營の真情なる可し。

本社が開戦以來、連戦連勝の號外に接して、狂喜せる國民の實情を、社會のあらゆる方面より、事細やかに觀察し、興味ある事實を寫實的に臚列して、この一小冊子を編せるものは、表題の如く出征諸君か、陣中無聊の友として、聊か慰安の一助にもせん微意のみ、其價格に至りては單に原料に値するのみ、大方諸君本社の微意を了せられ、一冊を購ふて、陣中の友を慰安せられんことを祈る。

明治三十八年六月霏々たる霖雨を聽きて

著者 識

陣中の友

陣中の友

目次

第一章 露西亞の歴史……………	一—五	第四章 日露戦争の略史……………	一七一—六六
第二章 露國雜話……………	五—一一	一 仁川のたゝかひ……………	一七
一 露帝の俸給……………	五	二 旅順の夜襲……………	一九
二 露國の人口……………	六	三 旅順口の大攻撃……………	二二
三 露西亞の大きさ……………	七	四 第二回の水雷夜襲……………	二四
四 露西亞の軍費……………	九	五 旅順口閉塞……………	二五
五 ヨーロッパ露西亞……………	九	六 驅逐艇隊の接戦……………	二九
第三章 日露戦争の由來……………	一一—一七	七 二度目の旅順口閉塞……………	三一
一 樺太と千島との交換……………	一一	八 マカロン中將の戦死……………	三三
二 大津事件……………	一一	九 九連城の占領……………	三五
三 三國の干渉……………	一二	十 第三回旅順口閉塞……………	三七
四 露國の横暴……………	一三	十一 南山の激戦……………	三九
		十二 得利寺の勝利……………	四〇

陣 中 の 友

十三 旅順口外の海戦……………	四一	二 詩……………	八〇
十四 摩天嶺の逆襲……………	四二	三 手紙……………	八三
十五 大石橋の占領……………	四三	四 新體詩……………	八八
十六 ケルレル中將の戦死……………	四五	五 笑ひ草……………	九四
十七 敵艦隊司令長官の戦死……………	四六	六 俗話……………	一一二
十八 浦鹽艦隊の撃破……………	四八	七 女と戦争……………	一一五
十九 遼陽の大戦……………	五一	第六章 陣中衛生の心得……………	一二六—一四三
二十 沙河の大捷……………	五四	一 心體衛生の心得……………	一二六
二十一 旅順攻圍軍……………	五六	二 衣服衛生の心得……………	一二八
二十二 旅順陥落……………	五八	三 飲食衛生の心得……………	一三〇
二十三 奉天附近の會戰……………	六〇	四 行軍衛生の心得……………	一三二
二十四 日本海的大海戦……………	六三	五 宿營衛生の心得……………	一三五
第五章 戦争文學……………	六七—一二五	六 行軍病豫防の心得……………	一三六
一 和歌……………	六七	七 傳染病豫防の心得……………	一四三

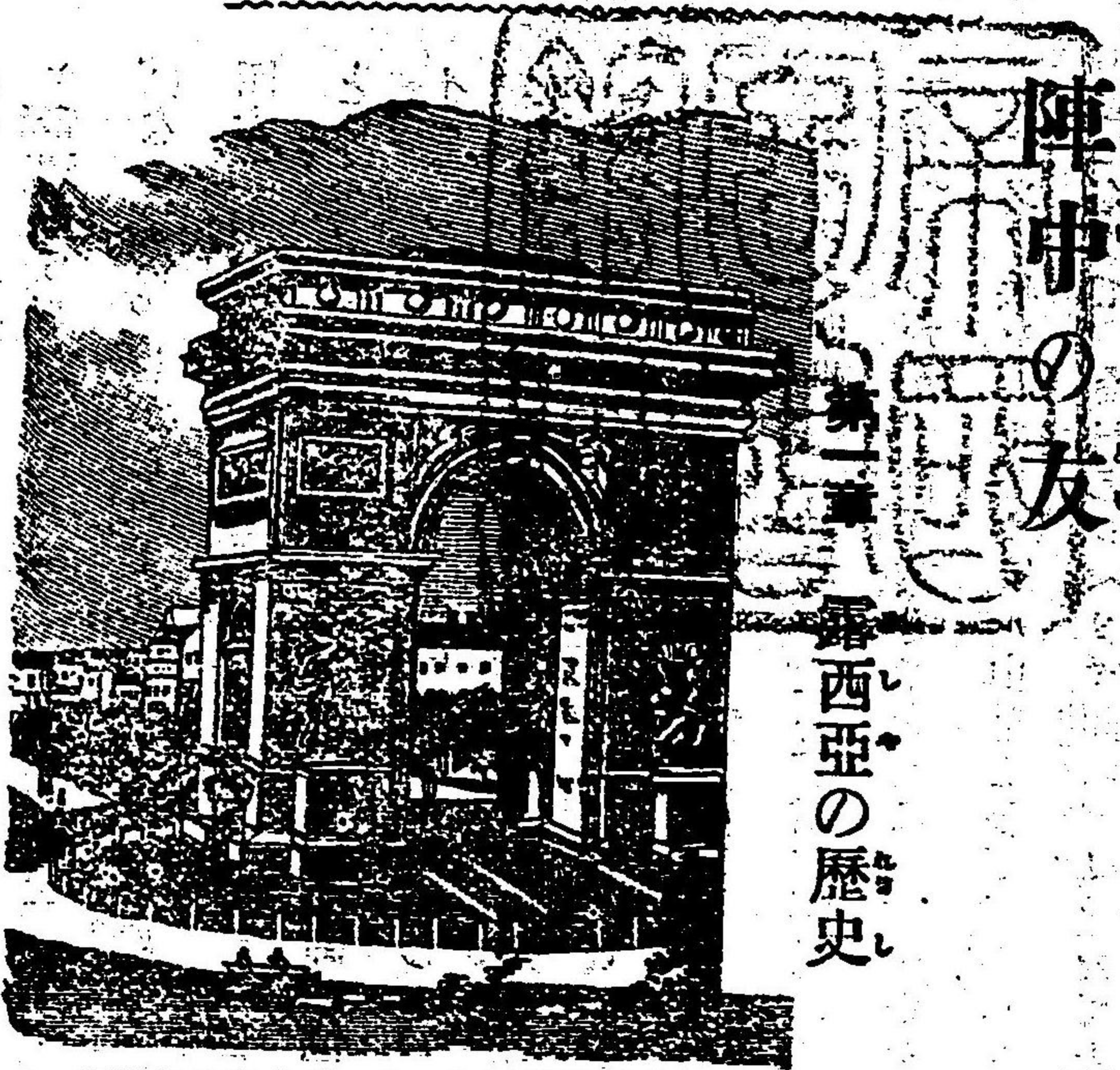


乃木大将とテスル軍將の握手



陣 中 の 友

第一章 露西亞の歴史



第一章 露西亞の歴史

智葉女史編

門旋凱の來未きへるいたに前社神國靖  
ロシアといふ大ばげ物は、ウラデ  
ミル一世（九八〇—一〇二五首府キ  
エフ）の時に生れたといつてもよい  
が、王は死後領地を其の子供に分け  
たから、國は全く亂れてしまつた。  
其の中に蒙古人が攻めて来て、之れ  
を征服して、二百年の間みつぎ物を  
たてまつらせた。まことに今のロシ

友の中陣

ヤ帝國をうちたてた人は、一三二八年にモスコーを首府としたイヴァン一世といはねばなるまい。しかしいよく全く蒙古の羈絆を脱して獨立したのはイヴァン三世（一四六二年、一五〇五）の時のことである。我國ではその頃足利將軍のもとに應仁の亂といふさわぎをしてをつた。神武天皇の御即位よりは二千年あまりたつてをる。このイヴァン三世は、ローマ帝の従妹と結婚して、ローマの文明をもちこんだ人、いくさをするよりもあさなひをしよといふ勘定高い人、一目にらむと、婦女子などはふるへ上つたといふひどい人であつた。ロシアの驚の旗じるしも此の人のときに出來たのである。（ローマ帝國のをうけつる）

イヴァン四世（一五三三—一五八四）が始めてザーといふ名をとつた。非常に残酷な天子であつたが、商工業をさかんにし、領地をひろめることには力があつた。有名なコサツク兵をして、ウラル山をこえて、シベリヤの荒野を征服せしめ、あまたの僧侶をわくつて、今日のシベリヤ領の基礎をたてたのはこの人である。

友の中陣

その子が不肖で、世はみだれ、ポーランドの王のために首府をとられるに至つたがミカエル、ロマンツフ（一六一三—一六四五）といふが起つて、ポーランド人を追ひ出して帝位についた。これが今のロシア帝室の先祖で、外國と和をむすんで、國內を繁昌させることに骨ををつた。

ミカエルの子がアレキシス（一六四五—一六七六）でポーランドにかち、コサツクを全くしたがへた。其の子が、最も有名なるペートル大帝（一六八二—一七二五）である。諸外國のことばを學び、ドイツ、オランダ、イギリスなどを旅行し、自ら船大工とまでなつて、西ヨーロッパの學問技術を輸入することをつとめた。スエーデンとの長い戦争に勝つた後、海軍をたてさんためにバルチック海へ出よとして、都をセントペテルブルグへうつした。丁度赤穂義士あたうちの翌年にあたる。ロシア帝が宗教上の大權をもにぎるよになつたのも、ペートルの時からである。陸軍の組織をあらため、農務工業をあげまし、溝をほり、道を開き野蠻のロシアに文明國の仲間入りを



させたのは此の帝である。

その後五代を経て、カタリン二世（一七六二—一七九六）の時、クリミアをとり、黒海を自由に航行する権利を得、またポーランドをわけどりにした。

その次ぎの次ぎの天子がアレキサンドル一世（一八〇一—一八二五）で、フィンランドをとつたのもモスコイを焼いて、ナポレオンを苦めたのも、露人が蝦夷へ來寇したのも、我國に公の使をよこし始めたのも此の帝の時である。

ニコラス帝（一八二五—一八五五）の時に露西亞の船が下田へ來たること、（嘉永五年）アレキサンドル二世（一八五五—一八八二）の時に露艦が對馬をおかし（文久元年）我にせまつて千島と樺太と交換させた（明治八年）こと、アレキサンドル三世（一八八二—一八九四）の時に、時の皇太子今のニコラス二世が吾國に來遊した（明治二十四年）こと、同し年にシベリヤ鐵道の工事をはじめられたことなどは、吾等のねぼえで居るべきことがらである。ニコラス二世の即位は明治二十七年で、其翌年はゆる

三國の干渉を我に加へたことは日本人の忘れんとしても忘れられぬことである。

第二章 露國雜話

一 露帝の俸給

露國皇帝は世界の天子のうちで、一番俸給を餘計にとるわかつたである。一日六時間、はたらくものとすれば左の十四個國の帝王又は、大統領は、一分間に次の表の如き報酬をとらるゝこととなる。

露國皇帝 百六十二圓

オーストリア帝 七十圓四十錢

イタリヤ帝 四十三圓三十錢

ドイツ帝 三十五圓二十錢

イギリス國王 三十圓

陣 中 の 友

スペイン皇帝 二十八圓八十錢

ベルジック王 九圓六十錢

デンマーク王 七圓二十錢

フランス大統領 三圓六十錢

アメリカ合衆國大統領 八十錢

此の表によつて見れば、國の元首の報酬は、其の國の大きさには比例しないことがわかる。アメリカ合衆國などはあんな大きな國であるが僅かに八十錢。しかし之れでも一年にすれば十萬四千圓餘になる。英國の國王は四百萬圓で、ロシア國帝は二千萬圓餘りである。

二 露國の人口

最近のしらべによれば、ロシアの人口は一億二千五百六十八萬六千八百八十八人で、其中男が六千二百五十一萬餘人、女が六千三百十六萬餘人である。

陣 中 の 友

この調査は本年三月三十日ロシアの官報に出て居たと新聞にある。一國の人口調べになると少くとも一年間ばかりから、之れは多分、一昨年末現在の概数であらう。して見ると戦争前では女子の数が六十五萬五千二百八十六人多かつた。日露戦争で既に三四十萬人の男子がへつたことであるから、ロシアでは益々女子が多くなつて、男子の相場がいよ／＼上つた譯である。

露西亞の將校の妻君がよく夫にしたがつて戦地に來てをる所以もこれによくわかると思ふ。

吾國では其の反對で男子が女子より五十萬も多いから、今度の戦争中數十萬の男子が遠征して居ても、本國內の男女の数は大抵つりあつて居る筈である。

三 露西亞の大きさ

露西亞は世界一の大國で二千二百四十七萬平方キロメートルある。日本は四十一萬七千平方キロだから、彼は吾の五十四倍、支那の二倍にあたる。そんな大きな國がこ

友の中陣

の日の出の國に向つて來ては、たわいもなくなげとばされるのであるから、ねもしろい。まるで象が虎にまけるよゝなものである。

それでもロシアの人口は一平方キロメートルに六人、日本人は百十一人である。ロシアは世界で最も人間の稀薄の國であるから、其の領分の中にれとなしく引つこんで居さへすればよいのに、よくをふかく、ほかの國までとらうなどとするから、それを吾々がこらしめてやるのである。

ついでに外のくにの人口を一平方キロメートルでいつて見ると、

- ベルジッダ 二三一人
- オランダ 一五七人
- イギリス 一三三人
- イタリー 一一三人
- ドイツ 一〇四人

友の中陣

- スイツツル 八〇人
- オーストリー・ハンガリー 七二人
- フランス 七二人
- スペイン 三六人

四 ロシアの軍費

ロシアの軍費はしまひまでどの位になるであらう。イギリスがポーア人を征服した時つかつた金は二十億六千萬金であつた。露國のもそれに過ぐるとも下ることはあるまい。これは一立方メートルの純金を八十五よせたほどのあたへである。實に大したものではないか。

世界に通用してゐる貨幣は金銀よせて、百七十六億であるから、イギリスでは世界のかねの八分の一をつかつたわけである。

五 ヨーロッパ露西亞

友の中陣

面積五百六十五萬平方キロメートル。歐洲の他の諸國の總計よりも大きい。されど其の海岸はさばめて短く、しかも冬季は大抵氷つてしまふ。シベリヤの方でも此の點は同じことである。これが、ロシヤのしきりに南下したがるゆゑである。

幅員東北より西南へ三千三百四十キロメートル。東西二千七百キロメートル。

海岸線 二萬二千二百二十七キロメートル、即五千五百里許りであるのに、日本は七千四百三十二里ある。

河の長さ ヴォルガ河三千五百六十六キロメートル、即九百十五里で我國で最も長い石狩河の五倍以上の長さ。信濃河の九倍である、ウラル河は二千三百九十六キロ。

産物 麥粉一千萬噸、葡萄酒二百五十萬噸、砂糖四十二萬七千噸、馬類千八百萬頭（日本百五十三萬）、牛類二千七百萬頭（日本百二十八萬）、羊類四千百萬頭（日本六萬）、豚一千万頭（日本二十萬）

穀物五億圓、金屬三億七千萬圓、石油千三百萬噸、鹽百六十四萬噸、鐵四百萬噸、

輸入三億五千萬圓、輸出三億三千萬圓

第三章 日露戰爭の由來

一 樺太と千島との交換

皆さんも御承知の通り樺太は一名サガレン島と云て、もとは、我日本の領地で在た。それを露西亞の國が欲しがつて我國を威したり、すかしたりして明治八年にとらうく千島ととりかへた。千島はあの通り小さな島が飛び飛びで、その半分以上はもとより我國の領地であつた。それをとりかへよとは何とも云ひ様のない無法な話ではなからか。しかしその頃は我國内がごたごたとして、軍の用意が出来てゐなかつたから仕方なしにさうしてゐいたが國民は残念にねもつてをつた。

二 大津事件

明治二十四年露國の皇太子、今のニコラス二世が世界漫遊の途次我國にも立ちよら

れた時。近江の大津でいきなり刀をぬいて、皇太子にさりつけ九津田三藏と云ふ巡査なども、平生権太事件などを憤つて居た爲めに氣がちがつたのであらう。幸御用の車夫が狂漢を抱き止めて、皇太子の御怪我は軽くすんだが、一時は國中大心配でかしくも天皇陛下を始め奉り全國舉つて早く露國皇太子の疵のなほる様にと祈つてゐたのに、露西亞の方では「日本は野蠻國である。日本は露國皇帝の仇である。かような國は討ち亡ぼせ」と學校で教へる書物にまで書く様になつた。いくらわからずやのロシヤでも、これは甚だ無理と云ふもの。間違と氣違は何處にもある、それを遺憾にかたきを討つてと云ふは平生日本を欲しくてならぬ所であるからさういはいよいよ口實にしたのであらう。さげば露西亞の士官學校では日本を亡す計略と云ふ題で作文させたと云ふ事だ。

三 三國の干渉

明治二十七八年の日清戦争のとき、我が陸海軍は朝鮮から遼東半島、黄海から威海

衛と、至る所連戰連勝した結果、李鴻章が媾和使となつて長州下の關へ來て、償金壹億五千萬兩の外に、臺灣と遼東半島を、我國にさへげて、平和條約が調印された。

その時、露西亞は佛蘭西と獨逸とを味方にして、三國一しよになり我國に向つて「日本が遼東半島をもつて居ては、東洋の平和に害があるから、之を支那へ返すがよからう。」と忠告をして來て「若し従はなければ、兵力に訴へるぞ」と云ふ景色を見せた、實に餘計な世話ではないか。

併し我國は清國と百戰の後で、三國を相手にしていくさをするには出來なんだから恨を呑んで其忠告に従つた。此の時の心持は上 天皇陛下を始め奉り下萬民にいたる迄、どんなであつたか云ふに及ばぬ。

四 露國の横暴

然るに間もなく露西亞は旋順口を、獨逸は膠州灣を、九十九年の約束で清國から借りた、そして、露西亞は、どしどし西比利亞の方から滿州へ鐵道を敷き、旅順は永久

友の中陣

築城をして、難攻不落の備へをした。もう旅順口も遼東半島も、自分のものにした積りである。何と不埒極まる國ではないか。戦争の結果、清國から我國へ素直に献上した遼東の地を、東洋平和のためだと云つて、清國に返させて置さなから、その舌の根の乾かぬ内に、自分でそれを我物にしよう云ふのは無法とも亂暴



梵天

執金剛神

とも、云はう様なさ仕方である。

五 北清事變

其の後明治三十三年に、清國に義和團と云ふ賊徒が起つて、外國人を誰彼の差別なく打ち拂はふとした。これは其の罪が義和團にもあるが、露西亞や獨逸が、親切らしく日本から遼東半島を返させたかと思へば、間もなく旅順口や膠州灣を取つたから、一般に外國人は畫中の強盗も同じだと思ひ込んだのも一原因であつた。清國の官兵も賊徒にくみしたのも之がためである。

此の時外國人は皆英國の公使館内にたてこもつた。清兵は之を圍んでしきりにせめてをる。そこでイギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシア、オーストリーなどの各國から速に兵を送つてまづ、太沽砲臺を乗取つた。その時は日本兵が第一に先登して、日の丸の旗を砲臺に推し立てるれから天津を占領して、道々義和團を打ち破り、北京へ附いて外國人の生命を救ひ、まもなく義和團も、平いて、平和條約も結ばれた。

扱義和團の亂を平げるには、日本兵が一ばん力があつたのに、露國ではれのれ一人はたらいた様なことを云つて、澤山償金を取つた上、滿洲に鐵道を敷く權利を得た。それからいよいよよくか驚の本性をあらはして、鐵道を守る爲めだと云つては、何千と云ふ兵隊を滿洲に入りこませ、又義和團の様な賊が出るのを防ぐ爲めだと云つては、何萬と云ふ兵隊を滿洲にとめたいた、支那からも外國からもいろ／＼いつたが、なかく引かぬ。其の上次第に鐵道や役所を建てこしらへて、まるで滿洲一體を自分の領地の如くにした。

清國は鐵道の敷設をば許したが、こんな兵隊を入り込ませて、露西亞に横領されようとは思はなかつた。殊に滿洲は天子の先祖のれこり出たところだから、尙以て心外の事に感じて、どうか早く兵隊を引取つて呉れよと頼むよりに談判したが、露西亞は少しも聞き入れない、馬の耳に念佛、蛙の面に水、しやあしやあととして澄まして居るから、兵力の弱い清國は如何ともすることが出来ぬ。

ところが我國は、支那の隣國として、黙つて見て居る譯には行かぬ、まして遼東半島は我將士の骨をさらしたところであるから、度々撤兵を露國に申込たが、するするといふばかりでしさうもない。のみならず益々兵隊を送つて備を嚴重にし、朝鮮までもねらつて居る様子、佛の顔も三度とか。我國も我慢が出来ぬ清國の爲めに露兵を滿洲外に逐ひ、支那朝鮮の獨立を扶け、そして我國の安全を計り、東洋の平和を保たねばならぬといふことに、國論が一定して、いよいよ明治三十七年二月六日に、貴國でいふことはあてにならぬから、こちらは、こちらで勝手にしますぞといひあつた。

### 第四章 日露戦争の略史

#### 一 仁川のたゝかい

露國と談判破裂ときさまるや否や、佐世保に、集つて居たわが艦隊は東郷大將にひらゐられて堂々と旅順に向つた。

其の中瓜生艦隊は途中から分れ、第二十師團をまもつて仁川に向ひ。八日の午後四時頃仁川沖についた。こゝには前から露艦のワリヤークとコレーツと居て。我千代田も之れとにらみあつて居たが、一艘と二艘ではとてもかなはぬから、七日の夜、そつと港を出て、瓜生艦隊に加はつてしまつた。敵も其の中に氣がついたと見えて、コレーツが旅順の方へも逃げるつもりであつたか、港外に出て来たが、我艦隊の舳舻相俣んで進むを見て、おめくくと引返した、我艦隊は、しづしづと港の中に入り、早速小蒸汽船や、端舟を出して、陸兵を午後六時から、夜中ごろまでの間に上陸させてしまつた。瓜生艦隊は、陸兵を上陸させて其の第一の任務をはたした後、露艦に向つて「我國と貴國との外交談判が破裂したから、吾等は君等と力くらべに来た。併し港内では他國の艦に迷惑をかけよゝから、九日の正午までに、廣い方へ出て入らつしやい」と云ひ送つた。すると露艦は、殊勝にも戦闘準備を整へて、ワリヤークを先にたて、時刻前に港を出て、八尾島の近邊まで来ると、忽ち砲聲一發、小艇にも、ワリヤークが淺間に

向つて、發砲したので、いよく砲戦が始つた。恨み重なる露西亞の船を、唯一討ちと撃ち出す彈にあだがなく、僅か一時ばかりの間に、ワリヤークは、左舷を破られ、コレーツは大火事を起して、後の帆檣が真中から、折れ、見るも憐れな姿になつて、二艘共港の内へ逃げ込んだ。

午後四時頃百雷の、一時に落ちた様な響のきこえたのは、進退谷まつたコレーツが、自ら水雷を爆發して、沈没したのである。ワリヤークもまた火を起したが、六千五百噸の巡洋艦だけあつて、二時間ばかり、眞赤な炎と黒煙を揚げて居て、最後に火が、艦内の火薬庫に移つたかと思ふと、おそろしい音がして爆發し凄じい焰を天に吐いて左舷の方から沈没してしまつた。

二 旅順の夜襲

旅順の方面に向つた東郷艦隊は二月八日の冷かなる日影が靜に支那大陸にかくれて、海は今にも眠らんとする頃、旅順を去ること四五十哩の所に現れた、之を率ゐる



陣 中 の 友

司令長官、智勇兼備の鬼大將は、明石艦からの情報によつて、敵艦が港外にねてゐるとを知つたから、電光石火の謀略をめぐらし、朝夕、白雲、曉などの水雷艇十艘に敵艦隊の夜襲を命じた、淺井大佐と石田中佐と土屋中佐とが之を指揮して一同決死の勇士を乗せ、勇み勇んで進んで行つた、旗艦三笠から「この一撃は、勝敗の分け目であるぞ。」



陣 中 の 友

死する覚悟で敵艦を轟沈せよ。一同首尾よく手柄をして、無事に歸るを祈る」と云ふ合圖をすると、水雷艇隊は、一層勇み立つて「必ず敵艦を轟沈しませう御安心下さい」と云ふ信號をしながら、波の音靜かに旅順をさして潜行して、十二時とも覺しき頃、目的の敵港外に着いた。

見わたせば、五百メートルばかり前面に、敵の軍艦十數隻が、果して、氣樂さうに横つて居る、大膽なる我將士は各々よい獲物をと狙ひよつて、今や大地を打つ槌ははづれてもこちらで放つ水雷のはづれ様はないと云ふ所で、下潮火薬のつめてある三間あまりの魚形水雷を一發旗艦のレトウイザンへ御見舞申すと、一萬二千九百噸の一等戦艦も、水線下に大きな穴を明けられて、見る見る中に傾き始めた。

さあ大變と、あちらもこちらも、大うろたへ。それ甲板へ上ね、それ砲門を開くと、寝ぼけ眼をこすつて、まご／＼してゐる間に、又もやツエザレキツチが其舷部に我が魚形水雷を受けた。續いて、バルラダ、ホルタワ、デアアナ、ナスコルド、ノーキツクなどの

友の中陣

巡洋艦も大事な處を撃たれたので、艦は見る見る沈んで行く凄惨な響は、あちらこちらに起る。

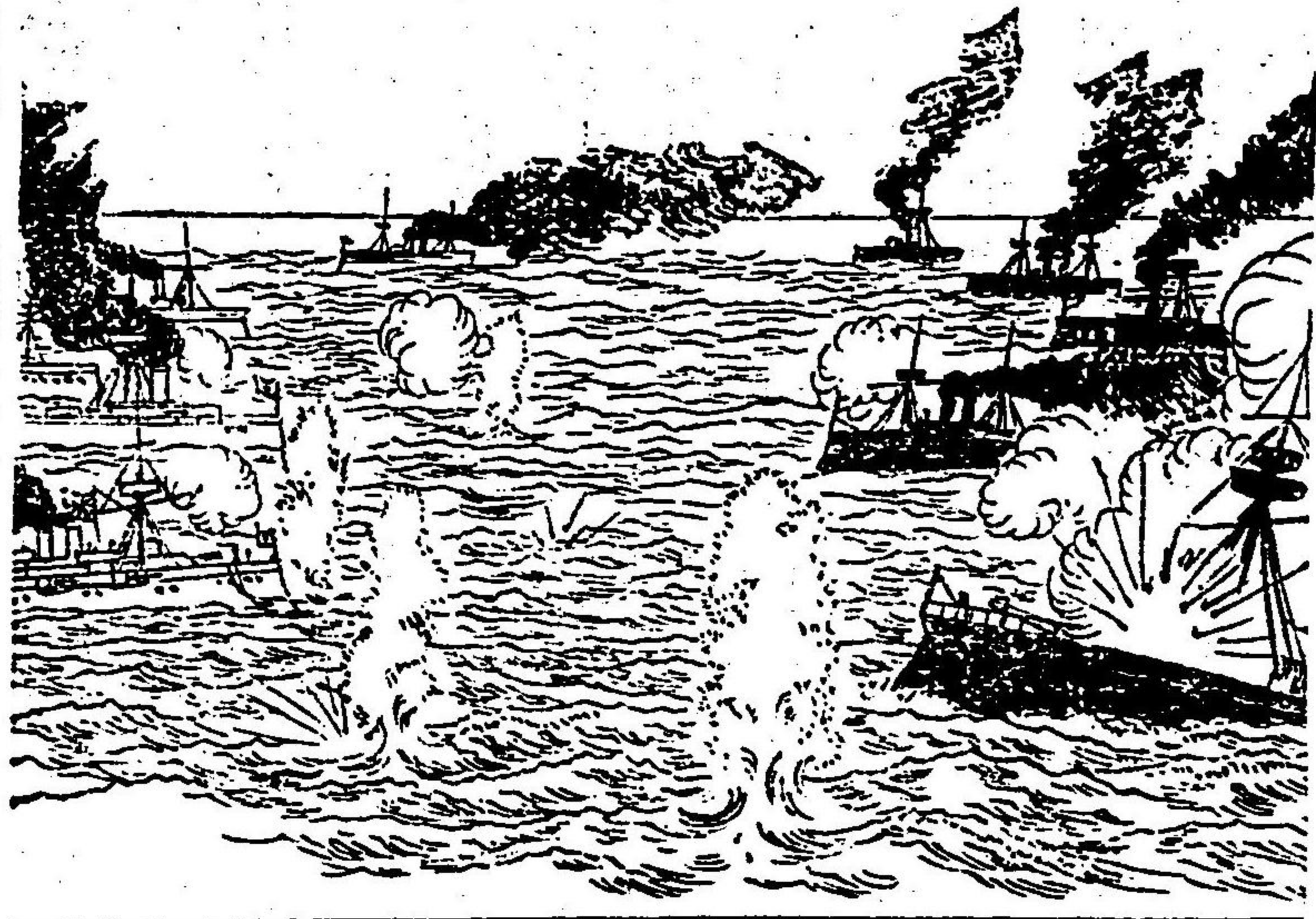
我が軍の各水雷艇は、落ちつき拂つて、二發づつの魚形水雷を發射し、各々手ごたへのあつた所を見すまして、午前二時頃悠々と、彈丸の中を引き上げた。

此夜襲は日露戦争の序幕であつたが、敵の大艦の大部分を破壊し、我には一つの損害をも被らないで、全艇全員、無事に根據地に歸り、赫々の偉勳を世界戦史の上に止めたのは、何ともいへぬ目出度いことであつた。此夜敵は司令長官スタルク中將以下各艦長を始めとして、陸上に芝居見物をして居たとは、如何にも呑氣な人たちである。

三 旅順口の大攻撃

東郷長官は此機をはずさず旗艦三笠以下數十隻の大艦隊を率ひ、直に根據地をはなれて、九日の正午には早旅順口外一千メートルの所に、橋上高く戰鬪旗を、翻しつづ

友の中陣



第四章 日露戦争の略史

進んだ。敵艦隊は昨夜の痛手によわり果てた處へ、又も、我大艦隊が現れたので、大うろたへに狼狽へて、照尺を定めずに、滅多打を始めた。鍛へにきたへた、我海軍は、敵の艦隊に近づける丈近づき正しく狙ひを定めて一度に數十門の大砲を撃ちかけた。我砲弾は續々敵艦に命中したので、敵艦は、我れ先きにと黄金山下に逃げよつた。

すると黄金山の砲臺は、三十八瓏以上の大砲を開き、我を目掛けて、撃ち下したから、我聯合艦隊は砲臺と軍艦

とを相手にして、凡そ一時間、大砲撃を行つたが、前夜やつつけた、レトウイザン、ツエザレキチ、バルラダを始めとし、アスコルド、ノキック、デアアナなど、皆大損害を受け、すくなくとも當分戦闘力を失つたのを見て、かちどきを上げて引き揚げた。

四 第二回の水雷夜襲

八日の夜襲に加つて、大連灣に向つた朝霧速鳥の二艦は、敵が居なかつた爲め、空しく引返したことを非常に残念がつて居たのを、東郷中將も思ひやつて、あだかも紀元節の祝日に、此の二艇に第二回の攻撃を命じた。司令海軍中佐長井群吉氏以下「今度こそは」と躍り上つて出發したが、あやにく大吹雪が起つて一寸さきをも、見分がたくしまひには各艇互に其姿を見失つたのにも頓着なく、めい／＼目的地に向つて進み、朝霧は十四日の午前三時、速鳥は同五時旅順口外に近づいた。

破れたりといへども尙大小數十艘の軍艦あり、ことに恐るべき陸上砲臺の守つて居る處へ二葉の驅逐艦を以て奮進した。

二艇のはたらきはいふにや及ぶ。雨とふりくる彈丸を事とせぜず、深く敵の艦隊に近よつて、各幾發かの水雷を發射した。大風雪のこととて敵の驅逐艦には同士討をしたものさへあつたほどなれば、何艦何艦と云ふことは出来ぬが、敵艦數艘に大損害を與へたことは確實であつて、同月二十日には、特に長井中佐に嘉賞の勅語が下つた。

五 旅順口閉塞

我海軍は數回の大攻撃で、敵艦隊に大けがをさせたが、十日、二十日とたつうちに、相應の修繕をして、のこ／＼と出て來まいものでもない。そこで東郷中將は、旅順口の入口を塞いで、敵艦を袋の鼠にしてしまはうと、企てた。抑も旅順の港口は、せまくて淺くて三四艘の船をなかほどに沈めれば、大きな軍艦は通れぬ位である。我軍では、かねて年とつたぼろ船にセメントだの鐵だの、石だのを積みつけて、旅順口閉塞のために用意してあつた。

そこで二十三日の夜いよく仁川丸、天津丸、武揚丸、武州丸、報國丸、の五隻を

陣 中 の 友

送つて此の企てを實行することになつたが、武器もない老朽船に乗つて、堅固に守つて居る敵港に侵入し、自ら其船を沈没させて、ボートで歸らうといふあぶない仕事に行くのであるから、真正に死を決した者を選びこませねばならぬ。

ところが、此の計畫を知つて我軍の將士は、われもくと志願して、其の數遂に二千人に達した。中には其の眞心を表さむために、血書血判の願書を出したものとさへもあつた。

人選の任に當つた上村中將は、其の中から七十七人を選抜して、五隻の閉塞船に分乘させた。而して眞野中佐の率ゐた四隻の驅逐艦隊が之れを護衛し、沈没船の乗組員を救ひ上るといふ大膽な役目をあびた五隻の水雷艇が之れに従ひいよく某地を出發して、午前三時半には旅順の港外に達した。燈火を消し、聲をひそめて、暗やみの中を、進みゆくど、先きに立つた天津丸が、不圖淺瀬に乗り上げた。續いてきた仁川丸はそれと知らずに突進して、今にも天津丸と衝突しさうである。天津丸は止むを得ず、大

陣 中 の 友

聲を上げて注意を與へた、其の物音が気がついたか、旅順の砲臺は、四ヶ所から探海燈を照し、雨あられと砲撃を加へ、忽ち一發武洲丸の舵にあつて、之れを動けなくした之に續いた武揚丸は今少し前進したが、やはり敵弾のため港口に達せぬ中に破壊された。

あとに残つた仁川丸と報國丸は、いよいよ重い責任をもつて、いよいよはげしい砲火を冒し、橋を折られ、甲板を射ぬかれ、蜂の巢のよゝになりながら、尙まつしぐらに進んで行つて、辛くも港口に達し、いづれも首尾よく爆裂薬に火をつけて、乗組員一同は萬歳を叫びながら、手速くボートを卸して、靜かに荒濤の中に漕入つた。

此度は報國仁川の二船が其目的地に達しただけであつたから、十分な成功を見ることは出来なうだが、これが爲めに、港口は、多少軍艦の通行にさしつかへる様になつたのみならず、吾が海軍のほゞこれを高めて、敵國のさもだまを奪ふ無形の効力は實に大きなものであつた。然るに仁川丸を指揮した齋藤大尉外三名の士官はそのことの

失敗をはちて頭髪をすつたと云ふ謙遜な美談がある。

美談をいへばまだいくらもある。今報國丸について話さうならば一等機關兵の藤本金太郎はいよ／＼船を沈める時一番あとにのこつてボートの綱をしかと引張り、全員を無事にのり移らせた。此の役目は極めて重いので。若しあやまつて綱を放せば、其の端艇がくつがへつて、十何名の乗組員を海底の藻屑としてしまはねばならぬ。彼は全員の命を一筋の綱で支へてをる折柄空をかすめたとび來つた敵弾のために、右の腕と頭部とを負傷し、見る／＼中に生々とした血汐か淋漓とほとばしつて、全身唐紅に染つたにもかゝはらず、満身の力をこめて綱にとりすがり、其の任務を完うした。それから又、指揮官の廣瀬少佐は、此のボートに乘移るとき、木、船橋にかけていた、日本刀のことを思ひ出し、雨霰と降つて來る彈丸の中を再び引き返して、取つて來た。指揮官が其の通りであるのみならず、部下一同は既にいふ畢丸の上り下りて度胸をためすといふことを實地に行ひ、ボートへ乗り移つた。いふ／＼自分の畢

陣 中 の 友

丸を検査したけれども、一人も縮み上つてゐる者はなかつたといふ。決死隊に志願した位のは皆かうある筈とはいひながら、天晴の覺悟といはねばならぬ、七十七人が皆此の覺悟であつたから、かの空前の壯舉も出來たわけである。

六 驅逐艇隊の接戦

露國旅順艦隊總司令長官芝居すきのスタルク中將は間もなく免職となり、その跡代りには、世界三大軍略家の一人有名なるマカロフ中將が、就任した。マカロフ中將は、三月一日旅順口に着いて、港内の軍艦を検査して、修繕すべきは、修繕し、引揚ぐべきものは引き揚げたが、前の失敗に懲りて、容易に出てこない。我が東郷中將は、敵の臆病軍艦が、もし出て來たならば、粉微塵にするよゝにと、三月十日の夜、水雷驅逐艇數隻を遣はして、旅順口に機械水雷を沈めさせた。

我が、驅逐艇は、甲乙の二手に分れて行つたが、甲驅逐隊が、午前四時半頃、老鐵山の南の方に進んで行くと、敵の驅逐艦が六隻ばかり、一隊をなして、こちらへやつ

陣 中 の 友

て来た。我が驅逐艇、朝夕、曉霞、などは直ちに進んで、敵艦にすれ合ふ位に近寄り、速射砲を開いてすさまじくなく、砲弾をあひせかけた。敵艦には、或は、機關を壊されるもあり、或は火災を起すもあり。其中で、撃たれて悲鳴を揚げる聲が聞えるかと思へば、狼狽へて海中に飛び込む奴も見える。三十分経つか経たないのに、六隻は、這々の體で、港の中へ逃げ込んだが、其三隻は、全く役に立たなくなつたとのこと。これが即ち舷々相摩して、戦かつたといふ、名高い、驅逐隊の海戦である。

乙驅逐隊は、敵要塞の發砲をもとせず、機械水雷沈設といふ危険な役目を果して、港外を去らうとするとき、敵の驅逐艇二隻を見付け出したから直に追付いて一時間の砲戦をした。敵の二艇は、大破壊を受けて、その一隻は命からく、砲烟の間にかくれてしまつた。他の一隻は我陣の乗組員が飛び乗つて、敵の士官を斬り伏せ、薙ぎ伏せ、綱をつけて引いて來ようとしたが、我砲火があけた穴から浸入する海水の爲めに、重さがまし、綱も切れたから、やむを得ず軍艦旗などを分捕つて引き上げた。

七 二度目の旅順口閉塞

それから十日間ばかり翼をひそめて、何か準備をして居るよゝであつたが、果して三月二十一日より二日にかけて、第五回の大攻撃が行はれ、二十六日には第六回の攻撃、壯烈さはまる二度目の港口閉塞か企てられた。そこで運送船千代田丸には指揮官兼總指揮官有馬中佐福井丸には廣瀬中佐と彌彦丸には森中尉、米山丸には正木大尉等合せて六十五人の勇士を乗せ、旅順口に向はせた。

閉塞隊は敵の探海燈を犯し、一文字に進んで、兩岸の砲臺及び驅逐艇より、盛んに砲撃せられたが、千代田丸は真先きに適當の處にて自から爆發して沈没し、福井丸は其の左りを少し通りこして、錨を下さうとすると、敵の魚形水雷がとんで來て爆沈してくれた。杉野曹長の死んだのは此時であらう。彌彦丸は、また此左側まで進んで、自から爆發沈没した。すると少し後れて來た米山丸は、敵の一驅逐艇と衝突しながらも千代田丸と福井丸との間を通りこして、水道の中央へ錨を下し、敵の魚形水雷に沈

めてもらつた。四隻とも目的とほり、港の口に列んで、立派に其任務をつくしたけれども、探海燈の光りの爲めに距離をあやまられて、始めの三隻は少し黄金山の方へよりすぎ、全く水路を塞ぐことの出來なんだのは残念であつた。併し其れまで十分間て通れた所を、一時間もかゝらねばならぬ様になつて、陸軍の運送に、後顧の憂が少くなつた。此の時不幸にも廣瀬中佐外三名は戦死し、島田中尉、正木大尉、栗田大機關士などは負傷した。中にも廣瀬中佐は無事てボートに乗り移つたが杉野兵曹長の居らぬのを見て、自ら船内二三度まで駆けもどつて、くまなくさがしたけれども、とうしてもわからぬので、涙を揮つてボートに戻り、敵弾の中を引き上げよとする一刹那突然港内より飛んできた敵弾が、不幸にも頭部にあたつて、僅に一片の肉を艇内に残り、壯烈の戦死をとげられた。中佐は平時に於ても酒をのまず、品行をつゝしみ、楠公を崇拜して、軍人の鏡といはれた人であるが、其の最期に於ても萬世不滅の手本をのこしたものと云つてもよゝ。

## 八 マカロフ中將の戦死

四月十三日には東郷司令長官か、又々聯合艦隊を引きつれて、旅順口總攻撃を始め、三日間の大激戦をして敵の旗艦ベトロバウロスクを爆沈せしめ、司令長官マカロフ中將參謀長モリス少將以下、數百名の將校下士卒を溺死せしめた、その外ポペーダを爆沈し驅逐艦を撃沈し、老鐵山の新砲臺を破壊して沈黙させたなど、未曾有の大戦争であつた。

この大攻撃の始まる前、先づ十二日の夜造兵大監種子田右八郎氏と海軍中佐小田喜代藏氏とが、主任となつて、旅順港の外に機械水雷を沈設して來た。此れが我軍大勝利のもつてである。

明くれば四月十三日の朝まだ薄暗い内に、第二驅逐隊が、黄金山砲臺の東の方を通行すると、四本煙突の驅逐艦ベストラチヌイが東の方から來て港の口へ這入らうとした。第二驅逐隊は、直にその行手を閉ぎ、十分間ばかり砲撃して、見る間に之を撃ち

沈めた。すると、又一艘の驅逐艦が、西の方から進んで来たので、之をも砲撃しよとしたが、その驅逐艦は忽ち、何處へか逃げ去つてしまつた。その内に敵の巡洋艦バヤン號が出て来たから驅逐隊は退却して、第三戦隊が入り代り、直に之を撃ち退けたが、彼は我が艦隊を弱勢とれもひ、味方に出港をすゝめたと見せ、まもなくノーウキック、以下の巡洋艦とペトロパウロスク、ポベード、ホルタワの戦闘艦とが大舉していつにない勢で、我第三戦隊に向つて来た。

第三戦隊はほどよくこれに應戦しながら、敵を南方十五海里に誘ひ出して、第一戦隊に、急報した。かくと知つた第一戦隊は、全速力を以て、霞の中から現はれて、敵艦隊を逆撃したので、敵は驚いて逃げだした。我艦隊は、しばらくまてと攻め寄せると、午前十時頃忽ち、百雷の轟く様な響きをして、敵の旗艦ペトロパウロスクが見る／＼中に爆沈した。これ即ち十二日の夜に、我軍の沈設した機械水雷にかつたのであるが、丁度この旗艦には、雷名世界に轟いたマカロフ中將を始め、敵の重なる將校

が乗り込んで居て、何れも其艦と運命を共にしたのは氣の毒なことである。

之れを見て青くなつた六隻は、あわて、港内にかくれよとするとポベードも、又我機械水雷にかつたが、外の艦に引かれて漸くのことに港内に逃げ込んだ。

翌十四日には、午後四時から聯合艦隊一同再び旅順口を攻撃したが、敵は主艦となつた司令長官を失つたので、いつそりとして、應戦する勇氣が無かつた。

十五日には、厚い甲板を持つて居て、上からうち下されても平氣である又きはめて精密な大砲を持つて居る日進春日をやつて、老鐵山の砲臺の下から、港内市内に、間接射撃を行ひ、港口の方に巡洋艦を廻して置いて一發毎にそのあたり所を報告させた。非常に損害を軍艦にも市街にも與へた。これに恐れて、此後はすべての軍艦が、港口にゐたままになつて、黄金山の下などに、うろ／＼してゐるよゝになつた。

### 九 九連城の占領

我海軍は敵の軍艦を封鎖して居るから、陸軍は、海上安全に、續々と朝鮮の北部に



友の中陣



三六  
上陸して、仁川から進んだ第十二師團の外に、近衛師團及び第二師團で第一軍をつくつて黒木將軍が指揮して満州へせめ入らうとしてゐる、四月の末からしばらく渡川準備の小戦を重ね、海軍の援けをもちかりて、中島から中島へ所々に橋を架け一方へ出ると見せて、他方にあらはれ、全軍急に三個所から鴨綠江を渡つたのは五月一日のことである、我が軍は直に沿岸の高地を占領して、そこから、近衛砲兵が日の出と共に、うつ

友の中陣

むいて九連城を砲撃し一時間ばかりで、敵の砲臺を沈黙させた。

勇敢なる歩兵隊は、進撃の號令が下るをあとしと、先を争ひ突貫して、敵の陣地を占領した。敗れた敵は西北の高地にふみどまつて、再び大砲をすすむが、しばらくはこらゑて見たが、到底わが軍を支へかねて、漸次鳳凰城の方へ退いた。わが軍は道を三方にわけて、之を追撃し近衛師團は蛤蟆塘の敵を三面より砲撃して塵殺にし、大砲二十門を捕獲した。

この日の戦ひに、敵の第二軍團長ザスリツチ大將は負傷し、第三師團長は戦死し、その他、參謀長及び數多の高級將校が戦死若くは負傷し敵の降参したのが、其中佐以下三百六十名あり、其死傷數は千五百名餘に及んだ。我が軍の死傷も田林少佐以下八百人とあつたが、一日の内に九連城に、その附近の高地を悉く占領したのは、實にめざましいはたらきといはねばならぬ。

十 第三回旅順口閉塞

第四章 日露戦争の時史

友の中陣

二回之れを行つてさへ、既に世界を驚かした閉塞の壯舉が、又も五月三日に企てられた。その船すべて十二隻、志願者二萬人の中からねらんだえりぬきの決死隊をのりこませ、林中佐、之が總指揮となつて、根據地を出發した。

出發した頃は、天氣晴朗、海上隠れてあつたが、午後十一時、俄に南東の風が起つて、狂瀾怒濤船を覆さんばかりである。その上暗さは暗し、各船が散々になつたから林中佐は成功覺束なしと見て、中止の信號を揚げた。然るに其信號がわかつて、引き返したのは只四隻で他の八隻は、一心不亂に進んで行つた。

第一に進んだ三河丸が、匠瑤大尉の指揮の下に、旅順口に這入つて行くと、敵は二回の閉塞にこりて、港口の兩岸には砲數をまし、黄金山と、老虎半島の新砲臺と力をあはせ、大小砲彈どりませて、雨絞の如く浴びせかけた。三河丸は物ともせず、ずつと奥の方まで這入つて、悠々と爆沈させ、短艇に乗り移つて歸つて來たが、乗組の過半數まで死傷したのは、やむを得ないことである。續いて佐倉丸は白石少佐、指揮

友の中陣

遠江丸(本田少佐、指揮)江戸丸(高柳少佐、指揮)小樽丸(野村少佐、指揮)相模丸(湯淺少佐、指揮)愛國丸(犬塚大尉、指揮)朝顔丸(向少佐、指揮)の七隻が、爆沈した味方の跡を乗り越へ乗り越え、猛進して行つた。敵の砲撃は、次第にはげしくなつて、猛烈に猛烈を加ふる上、敷設の水雷が、前後左右から、どんどん爆發するのみで閉塞隊の多くは、爆沈前後に、戦死して、歸つて來たのは、乗組員百六十名中五十名に過ぎず、しかし五隻までは見事に思ふつばへ沈んで、もはや、巡洋艦以上の敵艦は通行することが出来ぬようになつた。

十一 南山の激戦

第二軍は五月五日、上陸以來、日夜急行、十三里臺子から九里庄を陥れて、廿五日、南山總攻撃を行つた。第一師團は中央軍、第四師團は右翼軍第三師團は左翼軍であつた。

敵は十五珊以上の榴彈砲、十二珊の速射砲、その外數十門の大砲を備へ鐵條網をは

つて待ち構へて御座つた。

右翼軍は、金州灣に來て居る赤城、烏海、(艦長林中佐は第三回閉塞の指揮官で今度は戦死の名譽を擔はれた)の加勢によつて、三里庄から、金州城を陥れ、長驅して、南山前面の高地を占領した。右翼軍は之れに反して、大連灣から敵の砲臺の御馳走を戴いた上、大房身から九珊砲彈を見舞はれて大分苦戦した、中央軍も、南山正面の大砲撃を受けて、一層の苦戦、十六時間の激闘に、辛うじて地雷火を通れたかと思へば、忽ち鐵條網に引つかゝる。我兵がそれをとりつけようとして群集して居る處へ、速射砲をあびせかけられると云ふ有様であつたが、忠勇無雙の我兵は、こんなことでひるむものでない。益々勇氣を鼓して、三面から南山に突撃し遂に聯隊旗を南山城頭に翻した。續いて南關嶺三十里堡を陥れたので旅順は陸上の連絡も断たれ、全く袋の鼠、籠の鳥となつてしまつた。

### 十二 得利寺の勝利

敵將スタッケベルグは一萬五千の兵を以て、旅順を援はんために南下したが、我第二軍司令官奧大將は、素早く、之を探知し一隊を止めて、固く南山方面を守らせ、三道から大兵を北上させて之を迎へうつたのが得利寺の戦争である。

六月十五日、濃霧の中から砲撃を始め、中央隊が苦戦して居る處へ、左縦隊の砲兵が到着したので、大いに力を得三方よりスタッケベルグの兵を合撃した。敵は包圍の内において、如何ともすることが出來ず、數しれの死傷兵を残して退却し始めた。我左縦隊は、敵の逃げ道を塞いで、どんと砲撃したので敵は軍團長、師團長、皆負傷し、聯隊長以下最高幹部が全滅し、大恥辱にも、聯隊旗を戰場に棄て、潰走した。我軍で葬つた死骸だけでも千八百に達した。分捕の大砲十六門、捕虜は聯隊長以下三百名我が軍は死傷一千名、敵の死傷は、一萬以上に上つたであらう

### 十三 旅順口外の海戦

敵艦は其の後港内に整伏して、三ヶ月の間影も形も見せなかつたが、我が艦隊が間接

## 友の中陣

## 友の中陣

友の中陣

射撃を始めたのと、旅順攻圍軍が、だんだん近づくので居たゝまらなくなつて六月二十三日に勢揃ひをして港外にぞろ／＼と出て來たが、我艦隊の前面に現はれたを見て、へささをかへして、逃げ返つた。

我艦隊は、數多の驅逐艦と水雷艇を送つて、之を追撃させヘレスウキット型の大軍艦を轟沈させセバストポリとテイヤナとに大破損を與へた。

明けて二十四日には、ポペーダ型に向つて、前後二發の水雷を命中させ、二十七日の夜には、山田少佐の率ひる第十二艇隊が、黄金山の下で敵の一等巡洋艦をうち沈めた。

十四 摩天嶺の逆襲

摩天嶺は、實に要害の天險で、日清戰役の時には、支那軍が守つてさへ、容易にとせなかつたのを第一軍は六月二十七日にたやすく之を占領した。然に七月四日午前二時頃我吉井小隊が、前哨をして、居ると一中隊ばかりの露兵が、吶喊して來た、吉

友の中陣

井少尉は其小隊を、今村中隊の方へ退却させて、只數名の勇卒と共に、軍刀を閃かし、敵中に入り、獅子奮進の勢で、四角八面に斬つて廻つた。敵は少尉の日本刀のため、十數人さりとふされて、とても叶はぬと思つたのか、ぞろぞろと退却してしまつた。今村中隊が加勢にきて見ると、殘念にも、敵はもう逃げた跡だ。その中に高草木大隊馬場聯隊なども馳せ加はつて一人も逃すなと云ふ勢で、二里程も追撃した。

これにも懲りず七月十七日の夜明け頃、又もや、敵は、我が前哨に逆襲して來たから、前哨はわざと退却して見せると、敵は得たりや得たりと、追ひかけて來て四聯隊ばかりの兵力で、我左翼をとり圍まうとしたけれども、かねてまぢかまへてゐた、我が岡崎聯隊は、高地によつて、砲列を敷き、大小砲を揃へて、一齊に射撃を加へたから、敵はたまらず、退却を始めた。所へ我が歩兵騎兵の各聯隊が着いて、力を併せて、猛烈に敵軍を追撃し一千以上の死傷を生ぜしめた。

十五 大石橋の占領

我第二軍は、得利寺大捷の後、六月二十一日には、進んで熊岳城を占領し、七月五日には蓋平城を陥れ、七月二十三日より廿五日に渡る三日の大戦で、大石橋を陥れた。

この時は敵の總指揮官クロバトキンと、總參謀長サハロフ中將とも出陣して、敵軍の背後に控へて居る。此方は奥大將指揮の下に、左右中央三軍が、戦線を張つて行く。敵は、落し穴、鐵條網、地雷火などをしかけ、數百門の大砲を開いて我軍の近くを待つて居た。我軍は極めて、不便の地に居て砲撃もその効を奏さなかつた。そこで先づ右翼が、突撃をしたが、廿四日の日暮までには、まだ成功しなかつた。それではかうだぞと、午後十時、敵の疲れて、寢鎮まつたのを見計らひ、殆んど歩兵全體で、吶喊して夜襲をこゝろみた。敵は大砲を撃つまもあらばこそ、寢耳に水の不意襲にあつて、脆くも敗走してしまつた。

あくれば廿五日の朝、我が中央砲兵の大攻撃と、右翼の攻撃とに由り、敵をして大

波のくづれる如くに潰走せしめた。我砲隊は、心地よくも、狙ひを進め狙ひを進めして、之を追撃した。敵の死傷は二千人以上で、サハロフ中將コンドラキチ少將も大怪我をして、奉天まで逃げ延びたと云ふ騒ぎ。百二十門の大砲を有した、敵の五師團をば、その半數の兵を以て撃ち破つたのは、實に我第二軍の名譽と云はねばならぬ。

十六、ケルレル中將の戦死

我第一軍は、益々進んで八月一日、様子嶺一帯の地を攻撃した。敵の兵力は四師團以上で、勇猛なケルレル中將が總大將であつた。彼れは砲臺の上から戦争を見て居る最中、我砲彈に當つて、重傷を受け、まもなく戦死してしまつた。之が爲め敵の志氣は全く沮喪して、遼陽方面へ逃げ去つた。之れと同時に、大孤山上陸軍は、分水嶺より進んで栃木城を占領した。栃木城の敵は、二箇師團以上で、堅固な備へを張つて居たが、我軍の激烈なる攻撃の爲め、千人近くの死體を棄て、退却したこれにて我第一軍は様子嶺より進み、大孤山上陸軍は栃木城より進み、第二軍は八月二日にたやすく

海城と牛莊とを占領したから、そこより進んで、遼陽を三面から合撃することが出来た。

十七 敵艦隊司令長官の戦死

八月十日敵艦は、又々大舉して、港外に出た。背面から攻圍軍にせめられるので港内に居たたまらなくなつたのである。司令官キットゲフトを始めとして、各艦長今を最後と思ひさだめ、恰も、平家の壇の浦出陣の覺悟と見えた。

敵は成るべく逃げのびて、浦頭艦隊に合するか、又は、中立港へ逃げ込まうといふ積りで、あるから、急に急いで正午頃に、沖合三十哩の所まで出た。

膏藥張りの旗艦、レトウキザンを始めとして、ツエザレキッチ、ベレスキット、ポヘーダ、ボルタワ、セバストポリの六戰闘艦、アスコリッド、バルラダ、ノーキック、ダイアナの四巡洋艦をそれに驅逐艦八隻を合せて總計十八隻單縱陣を作つて、南の方へと走つて来た。

友の中陣

我聯合艦隊は旗艦三笠に戰闘旗を掲げて、敵十隻の艦隊一度に敵を取り巻いた。所は、昔、支那の北洋艦隊を大破した、黄海の沖。時は八月十日の午後一時頃。一發、二發、三四發、忽ちにして、敵味方の砲彈雨の如く飛び、黄海の波は逆捲き、天上の雲は驚き騒いだ。

我艦より打ち出す彈は、殆ど一の虛彈もなく、一時間の砲戦に、敵は、叶はじと逃げて行くのを追ひかけて、又も、第二の大砲戦を交へた。今度は、敵は我旗艦三笠ばかりを目かけて、砲撃する。三笠は、一彈を受けて、藤瀬中尉以下六七名の死傷者を出し、續いて、一彈が、砲塔に當つて、十二名の砲手を斃した。

この第二戦は、その日暮れまでも、續いたので、敵の戰闘艦、巡洋艦、何れも、大損傷を受け、大概戰闘力を失つて五隻の戰艦と二隻の巡洋艦は、引きつ、引かれつ港内に逃げ込んだ。ツエザレキッチは、我水雷を受けて、傾斜しながら、膠州灣へ逃げ込み、驅逐艦、レシテリヌイは芝罘に、アスコリッドは上海に、遁れた。ノーキック

友の中陣

は、一旦膠州灣に逃げて、石炭を積み込んだ上、樺大島ににげのび我艦隊の爲めに撃ち碎かれた。

四八

我が艦隊では、三笠、日進が最も苦戦して戦死者が多かつたが、何れも、戦闘力や航海力を失ふ様なことはなく、他の各艦は、何れも健全である。然るに、敵艦は、大抵、戦闘力を失つた上司令長官ウキッドグフト中將は、哀れにも、足ばかりを甲板に残して悲惨の最期を遂げ、司令官マセキツナ少將も重傷を受けて、膠州灣に戦死した。これで、旅順口艦隊は真正に全滅したといつてよい。

十八 浦鹽艦隊の撃破

今回の日露戦争に、我々の最も、悪く思つたのは、彼の浦鹽艦隊で、二月十一日には青森沖へ来て、何の罪もない商船奈古浦丸と全勝丸とを撃沈し、四月廿五日には韓國元山附近に現はれ、我が御用漁船五洋丸と金州丸を撃沈した。

更に六月十五日に至り、浦鹽艦隊は、我が對島海峡に現はれて、御用船常陸丸和泉

丸を撃沈して、佐渡丸を撃ち破つた。常陸丸に乗つて居た、某聯隊長須知中佐の如きは、軍旗を焼いて憤死した。將校下士卒の死んだもの、捕虜となつたものも随分あつた。

浦鹽艦隊は、これにも慄らず、津輕海峡を過ぎて、太平洋に出て、七月二十日、商船高島丸を撃沈した。その上、同二十四日には、伊豆の室崎沖で、英國商船を撃ち沈め、又東京灣の南では、他の英國船を捕獲した。

我が上村艦隊は、浦鹽艦隊追撃の命を受けて、凡そ半年の間、諸方を搜索したけれども、一寸檣や烟の跡を見せたばかりで、男らしく決戦もせず、雲を霞と逃げ去つて、行く先行く先で、抵抗力のない我が商船や運送船を撃沈して居る。實に、萬國公法にそむいた暴行である。

然るに、八月十日、黄海大海戦のあつた時、旅順艦隊は、浦鹽艦隊に合する積りて、突出したのであるから、上村艦隊は、その聯絡をたたらうと思つて居ると八月十四日、

うらうらと晴れ渡つた日の午前五時頃、浦鹽艦隊の三隻が、黒烟を吐いて、南進して来るのを見受けた。

五〇

尋ね尋ねた艦に遇ふたが百年目、いつかな、逃すものかと、上村艦隊は、出雲、磐手、吾妻、常磐の四隻を一字に並べて、敵の縦陣を待ち構へて居つた。

かくとも知らぬ敵の、三隻は、一日も早く旅順艦隊の逸出軍艦を救助したいと云ふので、一心に馳せて来た。

我が艦隊は、忽ち前面に立ちよさがつて、狙ひ違へず、どンドン、と砲撃した。敵艦は、前面から、砲弾を浴びせかけられて、ロシアに當らなければグロムボイ、グロムボイに當らなければリユーリックと、三重の的になつたから堪らない。一時間ばかり應戦はしたものの、ロシア、グロムボイ共に、五六回の大仕事を起して、大變の損害を受け、全速力で逃げ出したが、速力の遅いリユーリックは、いよいよ、我が艦隊砲撃の的となつて、先づ白煙を揚げたかを見ると、忽ち、墨の様な黒煙を吐いて、大

火災を起した。その上舵機を壊されて、進退の自由を失つて、獨樂の様に、グルグルと轉回するばかりであつた。

時に、我が第四艦隊の浪速と高千穂が現はれたから、上村艦隊は、之にリユーリックを任せて置いて、ロシア、グロムボイを追ひかけたが、逃げ足の早い敵艦は、もう雲霞の間に隠れてしまつた。

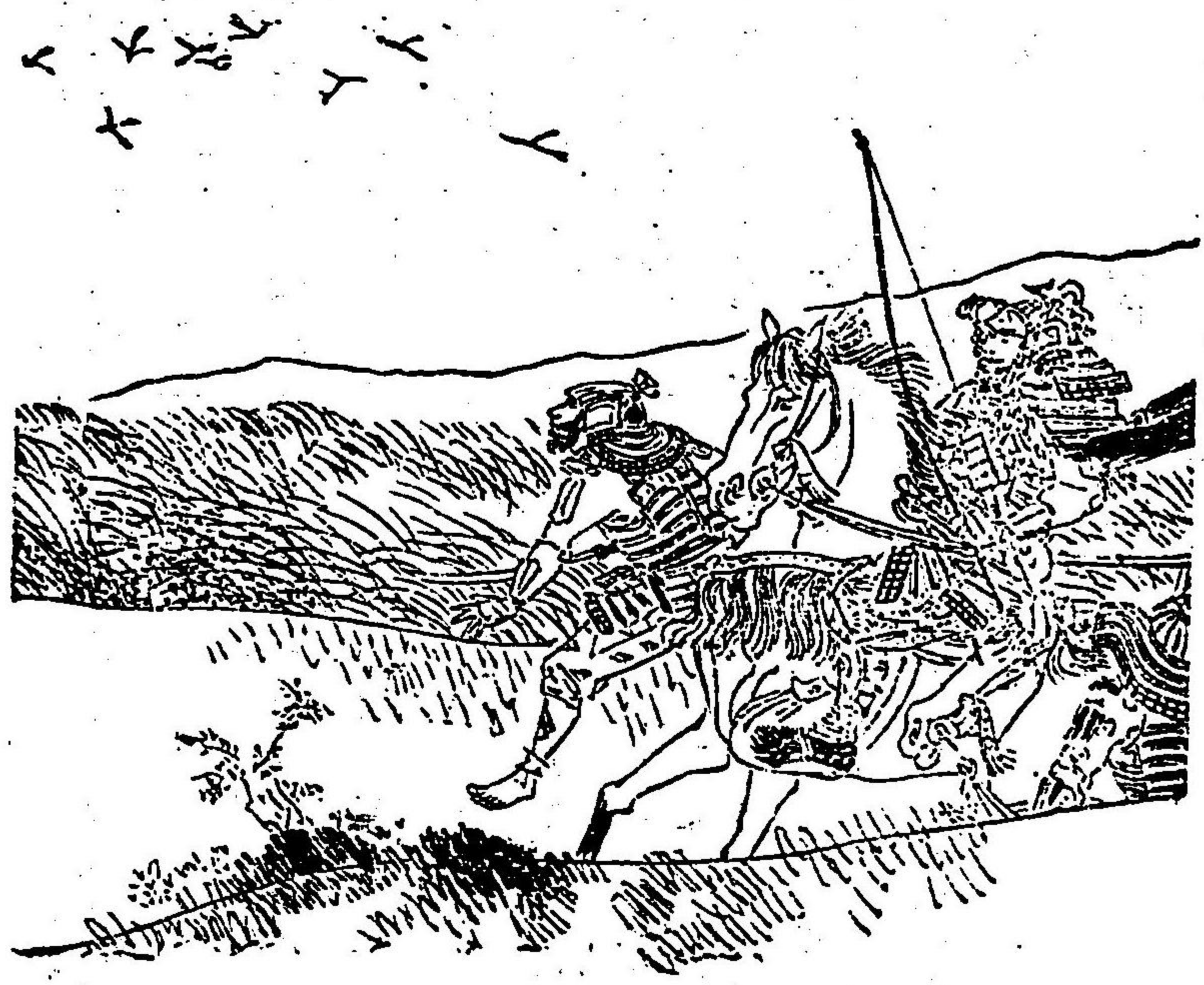
リユーリックは、浪速、高千穂を小敵と見てか、又々激烈に抵抗したので、二艦は、猛烈に急射を加へたれば、遂に、逆立となつて、沈没した。そこへ、上村艦隊が來合せて、六隻總がかりで、沈没艦乗組の敵兵六百一名の溺死を救つてやつた。今まで商船を打ち沈めて、其の乗組員をすくつたことも少い彼等は、我が軍のなすけに感泣したとのこと。世界でも日本は文明國たるにはぢぬが、露西亞は驚いた野蠻だといつてをる。

十九 遼陽の大戦

第四章 日露戦争の歴史



友の中陣



我が陸軍は、黒木大將の第一軍が、東方より、奥大將の第二軍が、南方より、野津大將の第四軍が、東南方から進撃するので、ロシヤ軍は、段々にけ退いて、諸方の落武者が、遼陽へ一ぱいになつて来た。

遼陽は東南西の三面に山脈を帯びて、せめにく、防ぎよい地である。此處にクロバトキン將軍は二十萬の大軍を集めて、各山脈の巔を守らせ、例の通り、落し穴、鐵

友の中陣

條網、地雷火などをしかけ、山上より岩石を落し、大砲を浴せかけるしかけをして。將軍自身は、停車場に本營を置き逃げ仕度まで整へて居る。

此方は大山元帥が總指揮官となり、兒王大將を總參謀長とし、第四軍が中央軍となり、第一軍が右翼軍となり、第二軍が、左翼軍となり八月廿五日から進軍しはじめ、廿九日まで、右翼は太子河の南岸から、大石門嶺、孟家房東方を占領し、中央と左翼は、孟家房から、未家堡、黒牛庄を経て漁家台まで、我が軍は、三面より半圓形をなして遼陽を圍んだ。

正味、遼陽の合戦は、八月三十日から、九月二日までの四日間である。敵は遼陽前面の、山脈、西は首山堡から東は黒英臺まで戦線を張つて、合計數百門の大砲を並べ、頑固に抵抗して居る。

三十、三十一兩日の烈しき攻撃にも敵は少しもひるむ様子がなかつたが、九月一日に至り、我は一層猛烈に突撃したので、敵は最早支へられなくなつて、首山堡の西の

高地を、我が軍にわたした。

五四

首山堡が陥いつては、もう遼陽は我物である。占領した高地から、うつむいて、遼陽方面殊に停車場附近を砲撃すると、敵は、たまたまなくなつて、北の方へ退却する。我が左翼及び、中央の聯合軍は敵の分捕砲をひきをかへて、直ちに、敵を追撃して九月二日、三日、四日、の間に、敵に數萬の死傷を與へて、全く遼陽城をのりとつた。

右翼軍は敵の退路を扼さうと九月一日より、黒英臺をせめたが、敵は、退路をたれては、ならぬと思ひ、五六個師團の兵を以てこれを死守した。それがために、岡崎少將の率いた各隊の如きは、古今稀なる苦戦をして、大隊殆全滅した位であつたが、九連城の大戦以來、きたへにきたへた黒木軍のことであるから、三日間の攻撃で、とらうく之れをも陥いれ、逃げ行く敵を追撃して、多くの損害を與へた。

### 二十 沙河の大捷

併し、我軍に豫備少かつたため、大追撃を行つて敵を總くずれにならせることが出来なつた。そこでクロバトキンは、奉天にふみとまつて、新たに送られた援兵を加へ、大逆襲を行つて、遼陽を恢復し、尙ほ南下して旅順を助けようといふ計畫をして、千門の大砲と、十六七個師團の大兵を以て、向つて來た。十月九日敵の大軍が、黒木軍の前面に現はれて處々の高地を占領したが、十一日の朝、我が軍は、悉く、高地を奪ひ返すと同時に我が中央軍も、左翼軍も、進撃の態度を取つて、翌くれば十月十二日、三軍並び進んで、敵を後方に壓迫して行くと、敵は、大砲を棄て、大混亂で逃げ始めた。これより、十三日、十四日、三軍そろつて總追撃をして、沙河の線まで達すると、敵は、とうく、奉天府に向つて、退却した。その間に、大砲四十五門、死骸一萬五千の外、數へきれない小銃彈藥を戰場に棄て置いた所で見ると、死傷の合計は六萬以上になつたであらう。敵の中堅たるアレキサンダー聯隊の如き精銳すら全滅した此に於て、我が三軍は、沙河を境として、砲壘を築き、ねひく寒くなつたから室穴をつ

くつて冬もりの用意をした。

二十一 旅順攻圍軍

他方に於ける吾旅順包圍軍は、數十の砲壘を以て堅固に守つて居る敵をせめる事であるから、また中々冬ごもりなどの話ではない。

願れば、五月三十日に青泥窪に上陸し、左右の二縦隊に分れて、旅順方面に進撃し、しばくはげしい戦ひをして居る間に、七月二十三日に至り、あらたに、有力なる一兵團が加はつて、中央隊となり、三隊並び進んで、七月三十日までには、旅順の第一防禦線は取つて仕舞ひ、尙ほ進んで八月十六日、旅順敵中の非戦闘員を避難せしめよとの、天皇陛下の詔と、勸降書とを、敵將ステッセルに送つたが、「降参せぬ、非戦闘員を避難もさせぬ」との、返答であつたから八月十九日、第一回總攻撃を開いて、八月廿二日、盤龍山の砲壘を乗取つたが、其の後はますます惨憺たる苦戦である。九月十九日に至り、第二回總攻撃を始め、攻城砲、及び、海軍砲を發射し、二十

友の中陣

日、クロバトキン砲壘を占領し、それから、大口徑砲、海軍砲を以て、旅順港内の敵艦を砲撃し、十月初旬には、ボベータ、ワベレスウキット、ボルタワ、レトウキザンなどに大損害を與へた。

がまだなか／＼安心は出来ぬ。ことにはバルチック艦隊がともかくも出發したといふから、その来るまでに旅順を落してしまはねばならぬといふので、乃木將軍は十月二十六日、第三回の總攻撃をはじめ、或は穴を掘つて進み、又は地をほつて上る。其苦しみ實に想像の外にあつた。中央隊は敵のP砲壘を占領したが敵が逆襲して来て忽ち奪ひかへした。我が一戸少將は烈火の如く怒つて、その日の中に突撃して之をとりかへした。之れより此の砲壘を一戸砲壘と名づけた。併し尙攻撃の目的であつた三龍山、松樹山、東鷄冠山の北の砲壘などはなか／＼ちぢぬ。中村少將は、白鉢白棒の抜刀決死隊を率ひて、松樹山に突入し、自ら負傷せらるゝ迄に苦戦せられたが之れも成功が出来なかつた。

そこで攻圍軍は第四回の總攻撃にとりかゝつて、専ら力を二百三高地に向けた。これは名の如く、二百三メートルの高さある小山で、旅順の市内は勿論、港口から、港外まで一睥の好地位にあるから、これがとれば、外の砲台は將基倒しに落すことが出来る。其れ故敵も一生懸命に防いで、實に容易ならぬ激戦、せめのぼる味方の將士は、頭上からあびせかけられる彈丸、にあはれバタバタと倒れる。乃木大將の一子が名譽の戦死をとげられたのもこの時である。而し猛勇無比なる我軍はたゆまずひるまず激戦數日の後、十一月三十日から、十二月の一日にかけて、終に此の要害を確實に占領した。

此の戦争には、兩軍の死者が非常に多かつたから、敵味方の軍使相會し、一部の休戦を約して、雙方の死傷者を收容した。其の時互に手を握り、酒をのみかはして、打ちとけた話をし、露將は我が戦死者の運搬を助けたといふ美談がある。

二十二 旅順陥落

二百三高地を我ものにしてからは、海軍砲をここにもち上げて、旅順港内を眼の下に見えろしつ、死にさらない軍艦を射撃した。さうして月の中ごろまでに戦艦四艘、巡洋艦一艘、砲艦一艘、水雷母艦一艘あはせて、八隻に止めをさしてしまつた。

砲臺の方も六日には赤坂山をとり、十七日には東鶏冠山北砲臺を陥れ、二十八日には二龍山を、三十一日には松樹山を取つて續々と本防禦線に穴をあけた。而して翌、明治三十八年一月元日には敵が最後のたのみにした望臺を占領した。

望臺は二〇三高地よりも旅順の街に近く、ことに、舊市街と東港とを見おろして、れもふ所へ大砲をうちこむことができた。

我軍は此のめてたき元日、此の望臺より二百一發の祝砲に、實彈をこめて、旅順の軍港及び市街にうちこわした。其の響のすさまじさは、萬山も一時に崩れるかと思ふばかり。

昔の大山大將



是に於て頑強なるステッセルもとらうかぶとをぬいて、元日の午後五時、使をよこして、我攻圍軍の總大將、勇猛無比の乃木將軍に降参のことを申込んだ。我が仁義の軍は直に之れをさきいれて、攻撃を中止し、三日四日に城受けとりがす

んで、三萬の露軍將士は皆捕虜となつた。

二十三 奉天附近の會戰

其の後我陸軍は黒溝臺へ逆襲して來た敵をめちやめちやに打やぶり、ついで奉天の大會戰があつた、沙河の會戰から四月半、旅順の陥落から二ヶ月経つての大戦であるから、智あり勇ある我滿洲軍司令官大山大將は、をさをさ其準備に抜目はなかつた。新士の精兵はどしどし寄る。旅順口を陥れた乃木大將も走せ加はる。今度こそ敵を殲にして、あはよくば敵軍の總大將クロバト

キンを生捕にしてやらうとは、將校連の考へばかりでなく、全軍の兵卒皆其の覺悟で腕をさすつて待ち切つて居た。

敵も亦今迄は負け續けに敗けたのだから、今度勝たねば世間へ顔向が出来ぬと思つて出来るだけの兵を本國から呼び寄せ、其の兵數凡四十萬大砲千五百門を以て、極めて堅固にかためてをる。戰線四十里に亘り雙方合せて八十萬の兵が、筒先を揃へ三千の大砲が火蓋を切つて戦ふ様は、どんなであつたらう。實に世界始つて以來の大戦争であるから、我々日本人は勿論のこと、世界の人が手に汗を握つて見て居た。

さて我軍は二月末からそろりと動き出して我最右翼軍は二十四日清河城を見事に攻め落し、堂々として更らに北の方に進む。其他の各方面もちりちりせめよせる。敵は我右翼を最も恐れて、一向其方へ兵力を集め、防禦を嚴にした爲め、我軍も大に苦戦したが、我左翼の方では、敵の兵力が存外手薄で、我軍の向ふところ、大風に草木が靡く様で、大石橋（前にあつた大石）では五萬の敵兵を見る間に蹙散らし、奉天近く

せめよせた。

そこでクロバトキン將軍ありたけの謀をめぐらし、我軍の中央をたちきつてうしろへ廻らうと想つて、この方面に向つて猛烈に攻勢を取つて來た。けれども、一步も引かぬが我軍のもちまへ、巨彈を頭から浴せかけて、散々にくるしめて居る。

かくて各方面の戦闘は、刻一刻に激烈になつて、八日九日になると、さしも頑固に抵抗した我右翼方面の優勢なる敵も、どんどん打破られて、馬群丹が先づ陥り、次で地塔も我手に落ち、撫順は今にも落さうな勢となつた、中央軍の方では、宛然要塞の様な萬寶山を乗つ取り總崩れとなりて逃げ行く敵を息をもつかず、追ひかけて、渾河のほとりに押し寄せ、左翼は又勝ちに乘じて、入家子を取り、遠く奉天北方の三臺子に表はれ、鐵道線路を破壊してしまつた。此に於て敵は唯一の逃げ路を失ひ、我軍の爲めに三面から包圍せられて死ぬか捕虜になるかの外、他に道はなくなつてしまつた。かくて九日の夜には撫順は我軍のために占領せられ、敵は鐵嶺として逃げ出した。

それより十時間経つかたたぬに奉天も陥落し捕虜ばかりでも四萬以上敵の遺棄したる死體が二萬六千五百人全損害は二十萬に近い。其他大砲六十門を始め小銃彈藥糧秣等山の様に分取つた。然るに我軍の死傷は意外に少く僅に四萬一千四百人餘であつた。さて奉天を占領し、撫順を陥れた後はどうであつたか。勝ち誇つた我軍は暫も休まず逃げ行く敵を追撃して十三日には、興京をとり鐵嶺をとつた。鐵嶺は名高い要害で防禦工事も充分にしてあつたが、敵はこゝを防ぎ兼ね遠くハルビン指して落ち延びた、國を出る、時間もなく、日本をまかして見せると大言壯語した黒嶋公も今度の敗北で全く評判がわるくなつて、今まで黒嶋將軍の下についてゐたリネツキチといふ將軍が其のかほりを命ぜられた。

二十四 日本海の大戦

奉天の大敗や、旅順の陥落も知らずに、安南近海まで、とにかくやつて來たバルチック艦隊も、彼所の港への港と進退ひ廻つて、頻りに中立港侵害を攻撃されて居た

が、いつまでこゝにうろついてゐる譯にも行かない、そこで司令長官ロジエストウェンスキーは、幕僚どもを集め、今後の方略について評議を凝した、ところが幕僚の中には、或は太平洋を迂回して、宗谷海峡を通るがよいといひ、或は津輕海峡によるが妙策だと唱へ、或は直ちに對馬海峡を通過すべしと叫び、議論紛々容易に決しない、そこで司令長官は斷然群議を排して、對馬海峡通過のことを命令して、いよいよ北進の準備を整へ、臺灣の東を通つて上海近くまでやつて來た、こゝで運送船や戦闘力の弱い軍艦は、皆上海に残し、精銳の軍艦ばかりすぐりぐりして、殆ど卅餘隻整々堂々軸相啣んで對馬東水道に進入して來た、時はこれ明治三十八年五月二十七日。

わが艦隊に於ては旅順陥落以來、銳を養ひ、勇を貯へて、日夜敵艦隊の邀撃を待ち設けて居つた處であるから、いよいよ敵艦見ゆとの警報あるや、東郷司令長官は、直ちに全艦隊に向つて令を傳へ出動を命じた。こゝに於て世界に於ける前古未曾有の大戦は開かれた、戦争は午前十時頃から夜にかけ翌日に亘つて續いたが、沈勇豪毅智

謀絶倫なる東郷提督の戰略一々圖に當り、さしもの敵艦隊も、全くわが包圍の中に陥つた、加ふるにわが姿勢の堂々たる、射撃の巧妙なると、水雷運用の敏活なるとは、見る間に敵艦をめちゃ／＼に打ち破り、敵の全艦隊は、殆ど總崩れとなり、沈没するやら逃げ出すやら實に非常なる混雜を起した、そこでわが艦隊は激烈にこれを追撃したので、逃げ延びた敵艦は僅かに三隻のみで、とゞ／＼敵將ネボガトフは、軍艦四隻を率ひて降伏し、司令長官ロジエストウェンスキーもまた捕虜となつて、わが軍に收容された。

昨年九月バルチック艦隊が、露の本國出發以來、露の上下では一般に、今度こそは日本艦隊を打ち破り、旅順以來の耻辱を一舉に回復し、うまく行けば制海權までも己が手に收めよと思つて居たにも係らず、たゞこの一戦で、めちゃ／＼に打ち破られ、殆ど全滅してしまつたといふに至つては、何んとか艦隊の末路も感ひべき次第ではないか、この海戦のために、敵の失つた軍艦は、實に驚くべき數で、戦闘艦六隻、海防艦

一隻、巡洋艦六隻は沈没し、戦闘艦二隻、海防艦二隻は捕獲された。また捕虜の数は六日五日までの調べによれば六千百十六人とある。それに反してわが軍の損害は、死傷僅かに三百十一人で、殊に軍艦一隻も失はなかつたに至つては、實に偉大なる成功といはねばならぬ。

元寇の昔、十萬の敵兵、ことごとく玄海洋の藻屑と消え、生き返つたものは僅かに三人のみと、いひ傳へられて居るが、處も同じ對馬附近の海上で、今回わが艦隊の攻撃を免かれて逃げ延びた敵の軍艦もまた三隻のみとは、實に好二對の奇談である、これによつて制海權は、全くわが手に歸したが、この上敵は如何なる方略を以てわれに向はんとするか、恐らくは、ウラヂホ、サガレン、沿海州は勿論、わが要求通りの償金その他幾多の條件を擧げて、わが軍門に降るより外策はなかると思ふ、果せるかな、露はいよく力盡き、北米合衆國を介して、講和をわれに申込んだといふことである。

第五章 戦争文學



一和歌

○肖像自讃 本居宜長

宜長は伊勢の人、加茂真淵の弟子にて真淵、東瀛とともに三大人と稱へられ、國學を大成したる人である。

しきしまのやまとごころを

ひとくは

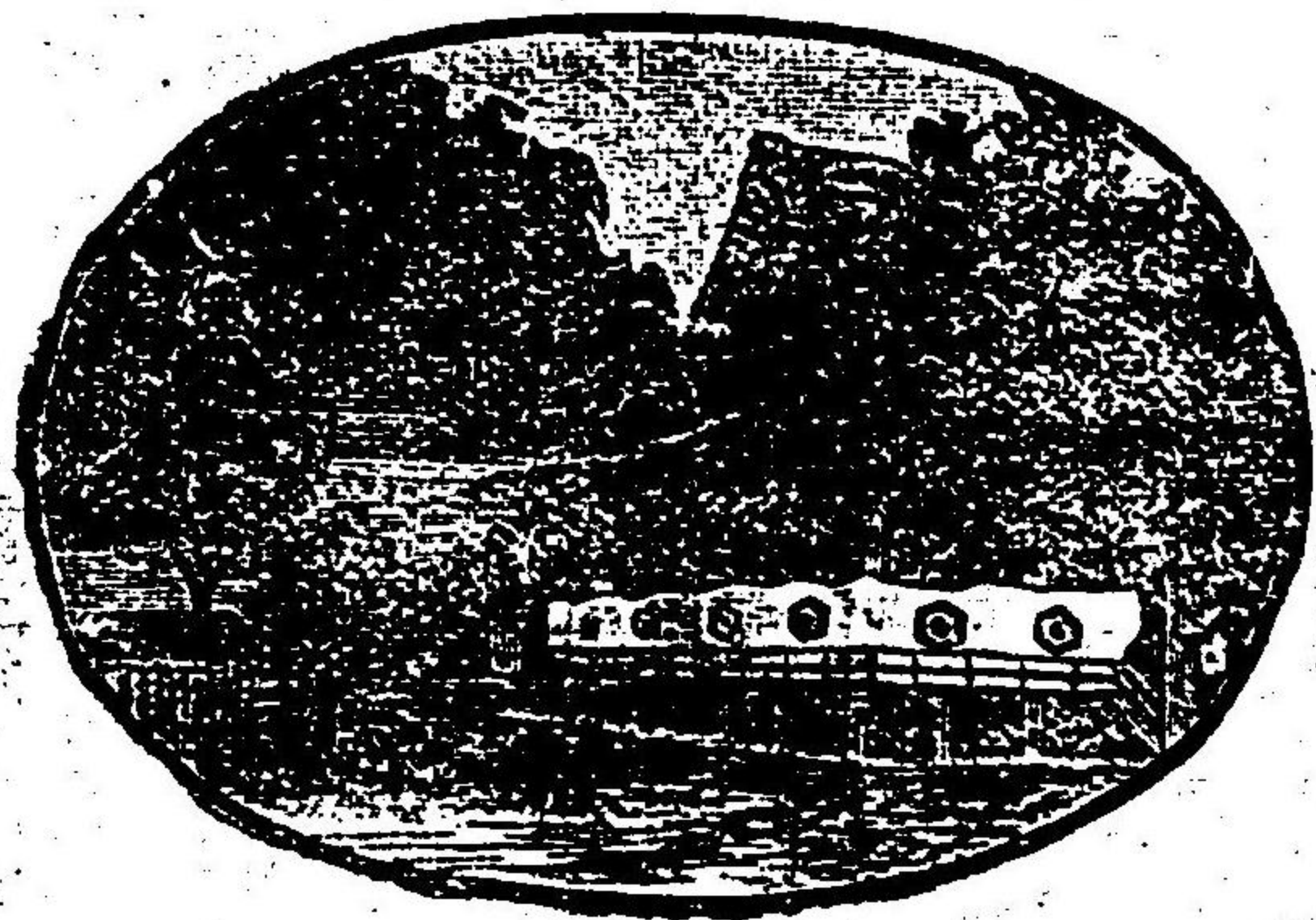
朝日にはほふ山ざくら花

(大意) 深くうつくしい此の花、實に日本男



友の中陣

子の心魂をあらはし得たり。其の朝日にほへるところ、最も秀麗。此の花と此の心とは日本にのみありて、他國になし。



心だに

まことの

道に

かなひなば

祈らず

ととも

神や

守らじ

(宣長)



友の中陣

○失題

高倉天皇の時、夜宮城の上に泣く、頼政命を奉じて之れを射、一發にしていころしたり。

源頼政

君が代は、ちひろのそこのさぐれ石の

うのゐるゝそとあらはるゝまへ

西行法師

○失題

文武に長じ、後鳥羽上皇につかへて左兵衛尉に任せらる。三十三にして世をのがれ、四方をめぐりて頼朝に鎌倉にあふ。頼朝銀猫をわくる。西行門を出て、之れを見意にあたへ飄然として去る。

吉野山、こぞのしほりの、みちかへて

まだ見ぬかたの花をたづねん

朝鮮をとりたれば満州に入れ、満州をとりたればシベリヤに行けといふことならむ。

○失題

山ばさけ、海はあせなんよなりとも

源實朝

君に一心われあらめやも

山はさけ海はひて淺くなる如き世になることありとも、われは天皇に忠義の一心のみ、又ほかのこゝろあらんや。

○失題

紀貫之

延長中土佐守をつとめ、かへりて土佐日記を著したる人、和歌の名人なり。世の中に、思ひはあれど子を戀ふる

思ひにまさる思ひなきかな

此は貫之が土佐にて子をうしなひし時の作。出征軍人がしばし故郷のそらをながめて、わすれんと欲してわするゝ能はざる者もまた其の子女の身の上にあらざるなきを得んや。しかも此のくるしみを忍びて國のためにわが身をさへぐるもの、これ真正の勇氣ならずや。此れ真正の忠義ならずや。

○失題

読人不知

あさみどり、野邊の霞はつゝめども

こぼれて匂ふ花ざくらかな

紅の梅を花櫻といふ。幾十萬人中にたてたる武功必らずあらはるゝはこれがためなり。

○病めるとき

山上憶良

憶良は奈良時代の役人にて、伯耆守、筑前守などをつとめたり。文事にたくみにて其の歌は世になだかし。

此の歌は、彼がやめるとき、ある人の見舞ひたるにこたへをはりてなみだをぬぐひつゝよめるなり。

男子やも空しかるべき萬代に

語り繼ぐべき名は立たずして

「男子やも」は「男となりなからずあ」といふこと。吾れ苟も男子と生れながら後世にのこすべき名を立てずして空しくなるのかとなげきたるなり。人は一生、名は末代。實に功名はしたきものである。

○黄金不多交不深

井上文雄

田安藩の侍醫なり。明治四年死す。唐詩選の一句をかかうつくしく、よみ出でたる、まことにめてたし。

思へたり世は山吹の花心

ちらぬほどこそ人も訪ひくれ

人と人との間、かくのごとし。國と國とのつきあひもれなじとなり。何々同盟などいふも久しくあてになるものにあらずとしるべし。

○失題

清水濱臣

東京の不忍の池のほとりに居たるによりて、和學ををしへたりといふ。文政年間死す。

開けてもうばらからたち掃はずば

また埋れなむ野中なる道

わが五十萬のつはものが、きりひらいて進んだ満州の野も、實業家の之れにつくものがなければ、ふる道にたちかへるべし。御用心御用心。

○別にのぞみて

近江の人、京都に和學を學び、ついに京都の四天王の一人にぞへらるゝに至れり。文化中死す。

伊 高 巖

ますらをはなげかぬものを別路の

袖に草葉の露やかゝれる

○失題

村 田 春 海

清水濱臣の先生にて、宣長と、同じく加茂真淵にまなべり。また漢籍に通じ、詩文をよくせり。此の人にして此のうたあり。いよくよし。

おりいづることまもろこしのしなはあれど

大和にしきにしきものぞなき

西洋の文藝武術をたてとし大和魂をぬきとして、なり出したるこそ、日露戦争と

いふ美しさにしきなれ。

○失題

澤 庵 和 尙

天正元年但馬に生る。十歳にして淨土僧となり、十四歳にして禪を學ぶ。幕府品川に東海寺をたて、澤庵をまねきて第一世とす。

ふもとなるひと木のはなを知りがほに

奥もわけ見ぬみ吉野の原

ハルビンまでも、浦鹽までも行かざるべからず。

○失題

藤 田 東 湖

みなと川身をすてゝこそ橘の

かぐはしき名は世にながれけれ

國家に盡すもの、心かけもまたかくあらまほしきものなり

○失題

楠木正行

正行四條殿に決戦しよーとして、弟正時等百四十三人と死をちかひ、行宮にいたり、龍顔を拜し奉り、出て、更に後醍醐帝のみたまやを拜し、やじりを以て同盟の姓名を如意輪堂の壁に書し、其後に

かへらじとかねておもへばあづさゆみ

なきかずにいる名をぞとどむる

○失題

宗良親王

後醍醐天皇の御子にて、後村上天皇の時、征討將軍となり新田義興等のかまくらをせむるとき、親王軍を武藏にすゝめ、この歌をつくりて兵士をばげましたまへり。

陣の中

君のためよのためなにかをしからん

捨て、かひあるいのちなりせば

○某君の戦地に赴くを送りて

佐々木春子

ますら男はかくぞあるべき御軍の

けふの門出のいさましきかな

○全

小澤清子

大君のみことかしこみ御軍の

先がけをする君ぞ雄々しき

○全

大塚園子

勇ましき君が門出をとりぐに

祝ふか門によるづ世の聲

陣の中

友の中陣

○全

雲井にもひびきやすらむ雁のすむ

若林清子

七八

○全

國に出たつ君かいさほは

榊原蝶子

唐國たかにありときくなるウラル山

高きいさほを君立てよかし

越智星子

○全

恙つなくかへりきませと祈れども

敵にうしろを見せな吾わが脊せ子こ

南波浪子

○扇を送るとて

心してひらけ扇あふぎのかなめとも

たのむは君の心なりけり

友の中陣

○全

森谷茂子

君かため送る扇の一すぢに

あふくは國の光りなりけり

○戦地にある君に送る

山中ひさ代

ウラル山うらなく君を

思ふにもハルビンまでと尙祈る哉

○全

峯子

うちよればなにはの事の

それよりも語るは君の噂うわさなりけり



二 詩

○題<sub>下</sub>兒嶋高德書<sub>上</sub>櫻樹<sub>上</sub>圖<sub>上</sub>

齋藤盛物

水戸の人。井伊直弼を櫻田門外に刺殺し、老中脇坂安宅の邸に投じ、封事を上りて罪をまつ。次て劊をやみて死す。

踏破千山萬岳煙。鑿與今日到何邊。短篋直入虎狼窟。一七深探鯨鰐淵。報國丹心嗟獨力。回天事業奈空拳。數行紅淚兩行字。付與櫻花<sub>一奏</sub>九天<sub>一</sub>。

○絕命詩

頼 醇

醉江戸に播送せられ、數々糾問せらる。乃ち曰はく、吾嘗て尊攘の大志を抱き、一二の同志と其策を議す。今日それを講ぜざるの談は國家の奸賊、夷狄の醜奴のみと言聲共に勵し。ついで刑せらる。

排<sub>レ</sub>雲<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>掃<sub>レ</sub>妖<sub>レ</sub>燄<sub>レ</sub>。失脚墜來江戸城。井底痴蛙過憂慮。天邊大月欠光明。身臨湯鏝家無信。夢斬鯨鯨劍有聲。風雨多年苔石面。誰題日

友 の 中 陣

本古狂生。

○述懷

藤田東湖

東湖閉居の時、僅に身を横ふるに足るのみ。而して東湖いふ。之を文天祥の士牢に比すれば猶華堂の如し。未だ以て吾正氣を害するに足らずと。

三決<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>。二十五回渡<sub>レ</sub>刀水。五乞<sub>レ</sub>閑地<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>閑。三十九年七處<sub>レ</sub>徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈<sub>レ</sub>皮膚。猶餘忠義<sub>レ</sub>填<sub>レ</sub>骨髓。嫖姚定遠不可期。丘明馬遷空<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>企。苟明<sub>レ</sub>大義<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>人心。皇道<sub>レ</sub>奚<sub>レ</sub>患<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>起。斯心奮發誓<sub>レ</sub>神明。古人有<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>斃而止。

○蒙古來

頼 山 陽

安藝の人。京師に遊學し、一日莊子を講ず。父の病篤しときさ、巻を投して直に發す。到れるときははすでにねろし。遺憾禁ずる能はず、終生また莊子をひもとかかふらん。

友 の 中 陣

筑海颶氣連天黑。蔽海而來者何賊。蒙古來來自北。東西次第期。吞食。嚇得趙家老寡婦。持此來。擬男兒國。相摸太郎膽如囊。防海將士人各力。蒙古來吾不怖。吾恐關東令如山。直前研敵不許願。倒吾檣。登虜艦。擒虜將。吾軍賊。可恨東風一驅附。大濤不使叛血盡。吾日本刀。

○前兵兒謠

頼山陽

友の中陣

薩藩勇悍の少年社をむすび、兵子組といふ。其の古謠に曰く、「肥後の加藤が見ぬたなら、丸に藥の御馳走申せ、之れて足らねばくび刀のひきだすもの」と、山陽其の意を譯せるなり。

衣至肝袖至腕。腰間秋水鐵可斷。人觸斬人馬觸斬馬。十八結交健見社。北客能來何以酬。彈丸硝藥是膳羞。客若不屬髮。好以寶刀加渠頭。

○子夜吳歌

李白

長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不盡。總是玉關情。何日平胡虜。白人罷遠征。

○陣中作

上杉謙信

兵法に精しく義氣にとむ。身體短小にして、氣宇斗の如く、意を風流によせて、詩をよくす。終生素食して婦女を近けず。性行潔白にして、胸襟爽快、戰國時代の一偉人なり。

霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山併得能州景。遮莫家鄉想遠征。

三手紙

○戰地より母(若は姉伯母へ)送る文



友の中陣

一筆申上まのらせ候私事何の障りもなく日々従軍いたし居候間、憚ながら御安心被下度候。先達は〇〇より進軍の命を奉し晝夜を兼ね〇〇に進み〇〇にて戦ひ申候。いづも必死を覚悟仕他人に後れぬ様にと心掛け相働さ候へども未だ負傷も不致身體至て壯健に御座候。是も吾日本國の神明の御加護と時々遙拜仕居候。近日何れ進軍の命下り候はゞ他に秀てたる手柄をあらはし家の名譽を輝し申度と存居候。戦地の儀は何と御心配相成候ても致方無御座候間皆々様只々御機嫌よく家業御出精被下度是のみ祈り居候。先は御安否御伺旁々近況申上候。草々敬具

○全友人に贈る

男兒骨を埋るは豈たゞ墳墓の地のみならんやと御同様に相吟し候通り小生も男兒らしき境界に立ち愉快の情何とも申上様無之候。砲聲轟々の間に泰然として戦友と語り、劍光相交る中に談笑致し候杯御國に在りては夢想する事も出来難き光景、貴兄にも御遙察被下度候。借而先便申上候後ち〇〇地占領其後は小戦のみにて大活動は無之候得

友の中陣

共不日號令相下り候は、出發勿論之事に御座候其節は亦々新らしき快報を呈し可申と日々相樂み居候、今夕清明過雁數聲遙に故國を想ひ併て貴兄の御事胸間に浮び申候御寸暇も有之候は、郷音承り度候敬具。

○郷里の親友に送る書

謹啓小生爾後健康に勤務罷在候間乍憚御休神被下度候當地は大陸の事とて風景内地と大に異り山岳の起伏峻巖ならず見渡す限り森林等の目を遮る者なく只所々に楊柳の矮小なる家屋と點々たるのみに有之候氣候は故郷に比し寒氣激烈に候得共一ヶ月以來大に減退仕り候奉天戰後兵站線の進むに従ひ輸送の便悪しく自然給養の道に缺くる所ある如く想像さるゝも實は然らず兵站の設備十分にして間然する所無之現に昨今我々下士卒の献立左の如くに有之候

朝 豆腐汁又は

和布汁

晝 ヒジキ豚肉煮込又は

切干大根鯉鱈詰

第五章 戰時文學

晩 牛糞野菜ゴツタ煮 又は豚肉甘藷煮込  
飯は四分の一麥を交へたるものにて一人六合宛漬物は大根梅干福神漬等に有之候只最も困難なるは飲用水の悪しきと乏しき事にて目下宿營地の井戸は多く苦水にて鹹味を帯び之を飲めば下痢を起す恐れあり故に炊事場用には石地式の澆水器（殺菌薬を装置せる）を用ふる事に致候其困難到底内地人にて想像し得ざる處に有之候小生等の隊も前線に交替致し敵と接觸するも近日に可有之候次便は一戦を経たる上に差上可申候先は近況御知らせ申上候早々

○郷里の娘に與ふる書

一筆申進候此節は新緑満たしり山鶯も啼きそめ候氣節となりて初鯉も市に上ぼるらんと思はれ候自分も出征以來幸ひに何の障りもこれなく一筋に職務大切と勵み居り候へば御安心これありたく候此程わくられし繪葉書正に入手その書様によれば靖國神社の臨時大祭は空前の盛典にて我戰友なる遺族の満足如何計りならんと被存候これにつき

ても自分等は一死輕きこと鴻毛の如く身命を君國に捧げて一塵の功を樹て次の臨時大祭に護國の鬼とならんことを期し居り候左れば御身も女ながら女を數行ひなくよく

母上伯母上の命つけを守り學校日課の餘暇には篤志看護婦の勤務にも怠らざるやう返すくも心がけこれありたく候此程は戦争も一時休みとなり局外にては何か花々敷ことあれかしと待居るやうなるが此休戦は所謂尺蠖の伸びんために屈するものにて遠からず大快報を聞かるともあるべしその時こそ父が運命をトする好時機ならんと樂み待れたく候書き送りたきこと山々なれども差急き右まで申進候追々暑氣に向ひ候へば飲食を節し健康を保つこと肝要に候母上にもこの由御申し可被成候可祝

○我師某先生に呈する書

肅啓初夏嫩業之候愈御暢適奉恭賀候次に劣生幸に瓦全罷在候間乍他事御休慮被下度候倍毎度御慰問且つ御激勵被下候御厚情不堪感激先日某地斥候の任務を帯び偵察の功を全ふし全軍に面目を施すを得たるは天時地理人和を併せ得たる徳倅に外ならず候へど

友の中陣

も暗夜飢寒に耐へ氷雪と闘いよく忍ぶことを得たるは一に先生御激勵の賜と奉存感謝  
致居候右偵察の結果不日一大躍動をなすの時機も可有之乎と相樂居り候幸ひに右の  
場合も有之候へば屍を馬革に裏み賤軀を捧げて報効の微忱を盡し豫て御教示の旨に背  
かざらんことを期し居り候此節御地は櫻花已に辭し藤英も亦た褪色追々菫若池上に頭  
を擡ぐる頃にも可相成候へば先生には例により茂叔を以て任せられ曉風清香の中に雅  
懷を洩らさるゝことと奉存候劣生も英雄胸中閉日月ありと自からすまして此程某地に  
て得たる一小盆栽を愛撫致居候御惠與被下候御扇特に報國盡忠の四字肝に銘して須臾  
も忘れ申間敷候尙追々向暑幸に御養護專一に奉存候右迄草々獲麟

四新體詩

○同朋よ

村の興作の馬さへも

祭らるゝものすめらぎの

清水橋村

戦にいで血を流し  
めぐみをつくる民草が

友の中陣

何忠ならぬとやある  
兄が作つた里芋を  
裏の婆さにくれてやる  
今日は草鞋のつくりため  
遺族に贈る代として  
願つて出たる話あり  
買へと貰つたね錢をば  
贈る料にと有志者に  
年期奉公の小僧さへ  
なまけず店に働いて  
下士にもなりて歸らんと

昨日は前の新田の  
一人息子の兵に出た  
噂衆もありと云ふ話  
町に賣りたるその金を  
加へたまへと村長に  
また小娘が半糸りを  
ためて煙草を戰場へ  
さし出したりと云ふもあり  
國の爲めとていさゝかも  
やがて兵士となるならば  
心こゝろに祈るほど  
兵士の苦をば思ひやり

國は勝つたり戦場の

友の中陣

いよく家業をねこたらず

○勸め休まず

敵艦見えて候ぞ

休めば休み働けば

勝ちたるとても今日あした

心にゆるみ出てぬれば

國を失ふもとどかし

職務を思ひよそ目せず

家にある者兵士等の

いくさは終はず海近く

○銃なき兵

日本の國の勝ちたるは

九〇

はげみ合ひなん同朋よ

同人

いくさはありて候ぞ

力のかぎりつとめよや

いくさは終るものならず

君に不忠の者のみか

はげめ休まず各々の

いくさのあるを忘るなよ

苦痛を思ひつゝしめよ

敵艦見えて候ぞ

同人

兵の勇武によるなれど

友の中陣

兵に砲なく彈丸なくば

砲と彈丸とは労働の

職工の手に造られて

兵はこを得て戰場に

國の守りとたゝかへば

さればいやしき職工も

國に忠なる武士の

銃なき兵は朝の日の

夜は星影にねむるらん

休むときなき労働の

肉をばへらし骨けづる

○日本海の大捷（五月廿九日夜作）

第五章 戦争文學

九一

勝つともまたなりがたし

いやしきものとさげすめる

戦ふ兵に渡さるゝ

かばねを隠し血をながし

たちまち破る敵の陣

また大君の民にして

功もありぬと稱へまし

輝く前に起きいでゝ

時をも知らでいとしみつ

その戦ひに死はなくも

苦しみを君憐れみね

友之中陳

時もよしました海もよし  
舳舻唼みて襲ひ來し  
藻屑と消ゆし歴史をば  
玄海灘は神々の  
時もよしました海もよし  
婆艦擧て數十隻  
颯程はるかに一萬里  
對馬の海峡横ざりて  
時もよしました海もよし  
大將東郷平八郎  
是に従ふ兵士は  
成算已に定まりぬ

弘安四年夏のころ  
元寇十萬海底の  
繰り返すさへ勇ましや  
護り給へる榮あり  
歐露の精銳すぐりたる  
會稽の耻雪がんど  
けなげにも我日の本の  
玄海灘にかへりけり  
我艦隊の總提督  
妙籌奇策神のごと  
鬼をも挫ぐ勇氣あり  
來らばさたれ婆艦隊

友の中陣

時もよしました海もよし  
旭出づるひまの露の彼  
海の續をたつべしと  
驚破やと勇む兵士は  
時もよしました海もよし  
我艦隊よりうち出す  
水雷美事に命中し  
急追撃の愉快さは  
時もよしました海もよし  
其他の敵艦損傷し  
敵の提督生擒し  
譽は高し浪よりも

敵艦來れりしちたれば  
瞬くうちに全滅し  
いとも凍々しき信號に  
忽ち艦隊進めけり  
弦を放れし矢の如き  
砲弾一もあたはなく  
陣を亂せし敵艦を  
風の木の葉を捲く如し  
撃沈十五捕獲七  
残るは僅かに二三隻  
目出度凱歌を奏したる  
玄海灘の夫よりも

## ○鍋ぼこ

閉口亭 綾丸述

エイ申上ます、鬼角な話は真面目ではいけませんナ、一寸お笑になつて然うしてた腹にのこらない極くあツさりと致した處を伺ひませう。コレ誰か居るのかそこに……トお呼になりますと従卒が直くまゐります、隊長がお呼になるト其お聲を聞畢らぬ中にハイと言つて直ぐ参りますナどうも感心な事て、吾々どもの弟子などと來たら、ヲイ一寸さてくれ要があるんだヲイどうしたんだ早くさてくんな杯と二三度位、よんでもアイいまゆくヨいま芋を喰てるんだ三本のこつてるから之を退治てからゆくよなどと言ますがソコへゆくと軍隊はるるふ御坐います、従卒は乙戸柄内と云名て妙な御姓名てげすな。エ、と柄内いす大連海からこの鮫を貰つたんだ、これを肴にして今夜一杯のみたいのだ勝時大尉や千領少佐も來る筈だから夕刻までにこれを蒲鉾に拵へて置け、よいか。畏りました隊長閣下、鮫は蒲鉾がよいので御坐いますか。勿論東京でも鮫

## 友 之 中 陣

のかまぼこと來たら辨松でも安くないヨよいか七時までにとチャンとお命じになる、夕刻になると大尉も少佐もね出になりまして國光と云瓶つめの酒で一杯召あがりながら。コレコレ先刻たのんだ蒲鉾を持てきてくれ。ハイト柄内君ね持になつたのを見るとブツ／＼と切て鍋で煮て御坐りますから。コレどうしたんだナゼかま鉾にせぬか。デモ釜は御坐りませんから鍋鉾に致しました。

## ○頓智

豊太閤ある年の十五夜、聚樂のねやしきて、觀月の宴をね開きになりました。其席には豊太閤の腰巾着ともいふべき會呂利新左衛門も侍つて居りました。すると太閤殿下が會呂利に向ひ「これ其方の智恵を以てコレに坐つてをる我を庭前へ下して見よ。若出來たらば褒美として此刀を取らせよう」と云はれました。會呂利一寸首をひねりまして「お辭には御ざりまするが然様なことはもつたいたくなくて出來よう筈がありません。併し君をね庭より此座敷へ上げ奉る事はいと容易かと存じまする。」「ンムム

## 友 の 中 陣

らば其方、我を座敷へ上げて見よ」と云はれまして其儘庭へ下りになりました。會  
 呂利莞爾笑つて「わ約束通りわ刀拜領願ひたう存じまする』また吾をさしきへ上げな  
 いてはなにか』命せ通り君を庭へ下ろし奉つたてはござりませんか」と答へまし  
 た處太閤は膝をうつて「是はやられた、例もながら其方の頓智には感服した。」と仰せ  
 あつて、わ側の刀を會呂利に與へられました。

## ○狂言

コレは隠れもない太郎冠者黒鳩の金で御坐る。いかなる御用か知らぬか、いそいで歸  
 れとの御説じや昨年以來戦ふたびに敗北いたしたに由つて皇帝陛下腹を立せられこの  
 太郎冠者をわ呵りなさるのであらう、恐ろしやく／＼しかしなから歸らずは猶ほ腹を立  
 せらるゝてあろう致し方か御坐らぬ急いで参ろうイヤ／＼急いで参つたところがわ  
 褒美を下さうやうと云ふてはないと目玉を頂戴いたすのじゃソロリ／＼と参るふア、  
 面白ふもない旅じや心くるしい事で御じやる、参るほかにゆくほどにモ一これじやも

## 友の中陣

の申す案内申す太郎冠者たゞ今も参りました」ナニ太郎冠者が戻つたといふか。已れ  
 は／＼ようも、日本の奴原にまけ居つた。どの面さげてため／＼と睨か前へ出をるぞ。  
 コレよく承はれ。吾か露西亞の國は開闢以來いかなる強國と戦ふても、一度も不覺を  
 とらぬ國じや。日本の如き小さき島國を相手にして、戦ふたびにうちまけ、四十萬人  
 に近ひ死傷者を出し、守る城をばみな奪ひとらるゝと云ふ事かあらふか。コ、ナ腰ぬ  
 け者めが「頼ふた人の仰せては御坐れど、なんといたいても日本の兵に勝ことはなり  
 ませぬ。」ナンと言ふぞ、なんとしても勝てぬといふか。「なか／＼」その仔細を申せ。」  
 仔細と申は、日本の日の丸の旗を見まするか否や、吾露兵は皆なツナ／＼とうち慄ひま  
 する程に、鐵砲の手法か狂ふて、空に向つて打つもあり背ろの方へうつもある、一ツ  
 として敵の方へは得うちませぬに由つて、味方のみバタリ／＼と斃れ、かく大まけを  
 致しました。今に御覽なされ露西亞の都は日本に取られ、頼ふた方方は佛蘭西へ駆落  
 さるゝやうになりませうぞ。「ア、こゝな腰ぬけが。不祥の事を申す。已れゆるさぬぞ

## 友の中陣

く。怖ろしやく。やるまいぞく。ゆるませられい〜。

○一錢で二本にまける

下總の銚子港ちやしこうで近年稀なる鱒いしほの大漁たいいしほがあつた。之を賣るもの一本七厘なりといふ。賣  
 錢で二本にまける」と云ふも彼まけず。買ふ人「日本にまけなければならぬ」といふ。  
 買人手を拍つて曰く、「一戦で日本に負けます。」此に於て兩人手を打ち「日本萬歳。」

○日本大男表

七尺五寸	野見宿禰	(體量 四十五貫)
七尺八寸	宮麻路速	(同 四十八貫)
七尺五寸	紀名虎	(同 四十二貫)
七尺餘	領西八郎爲朝	(同 三十八貫)
七尺五寸	山村伊豆守	(同 四十二貫)
七尺五寸	河津三郎祐泰	(同 四十二貫)
七尺二寸	朝比奈三郎義秀	(不詳)
七尺五寸	武藏坊辨慶	(同)

陣の中 友

七尺	岩見重太郎	(不詳)
七尺一寸	小勝間太鬼	(同)
七尺八寸	大力學士	(同)
八尺	眞斐成村	(同)
八尺三寸	明石志賀之助	(體量 四十九貫)
七尺五寸	仁王仁太夫	(同 四十三貫五百目)
七尺三寸	雷電龍右衛門	(同 四十三貫)
七尺	稻妻電五郎	(同 四十二貫)
七尺三寸	鬼勝象之助	(同 四十七貫)
七尺	黒岩勘太夫	(同 四十貫)
七尺餘	九國山新治	(同 三十八貫)
七尺	雲井辨太夫	(同 三十六貫)
八尺	釋迦ヶ嶽雲右衛門	(同 四十二貫)
七尺五寸	鬼ヶ島磯右衛門	(同 三十八貫)
七尺	二所ヶ瀧軍太夫	(同 三十八貫)
七尺六寸	九紋龍清太夫	(同 四十八貫)

第五章 戦争文學



友の中陣

- 七尺九寸 雷 權 太 夫 (天正年中)
- 八尺二寸 石 鎚 右 衛 門 (不 詳)
- 七尺八寸 牛 股 武 右 衛 門 (同 三十八頁)
- 七尺餘 生 月 鯨 太 左 衛 門 (同 四十五頁十九)

○伊國公使の諧謔

伊國公使メレガリー氏は頗る日本最負の人なるが日露開戦以來新聞の號外出る毎に一枚も残らず買ひ取らしめ其戰勝を祝しつゝあると聞きつるか嘗て埃國公使館夜會の節寺内陸相等に對し語り出て、曰く日本の戰勝は全國の八百萬神か會戰の都度麻に在る神馬に乘し深夜脱出して戰場に赴き大に加護せらるゝに由るものなり露國の神は一人なれども日本の神は八百萬なり露國の之に勝つ能はざるも亦た道理ならずやと一同は氏か日本の事に精通せるを感じ滿場大笑ひなりしと

○大岡越前の離婚裁判

某郷に夫婦があつた夫の年は三十五で婦の年は十五であつたと婦の父母か娘の年

友の中陣

未幼くして箕箒に従ふのは可愛想たと思つて離婚の裁判を大岡公に仰いだ公は早速に婦の父母を召し出して離婚の理由を糺された父母曰く三十男に十五の妻と云ふ俚諺もあるから三十に十五ならばよいか三十五に十五では其半數にも及ばないから離婚を訴へた次第であると陳辯したすると大岡公曰く半數ならば我慢をするのであるか父母曰く御意なり我慢すべしと公曰くさがれ更に呼出すべしとそれから何年たつても呼出しが無い漸く五年目に呼出しがあつた大岡公曰く今日は申渡すべし今日尙は離婚を講求するかと父母唯々として退いた

編者曰く、五年立つたら夫は四十歳で婦か二十歳で恰度夫の年齢の半數になつたのである

○菌の奇談

太閤秀吉山城の内山里と云ふ所を求めて梅松と云ふ坊主に預けられ新に松を植立られたすると程なく松茸生じたりとて献上した豊太閤笑つて吾か威光だ賊に左もあらんと

云はれた其より度々献上した太閤左右のものを願みて云ふもはや松茸献上すること  
止めさせよ餘り生ひ過ぎると梅松大に閉口せりと

○訓

子爵 福羽 美 静

わか國は神明の開きたまふ所すなはち萬代不可動の王統を定めたまふ所なりこれによ  
り其本體を維持しつゝきて世界にその美國の美をあらはさざれば叶はざるものなりさ  
て其ことをなさんとするには豪邁の愛國者を欲する也又其才略縱橫なる人を欲する也  
かりそめにも少量の計略ある人に國家をはからすべからず又苟且の安を欲すまじきと  
となり上下この欲をわするべからざるこれすなはち神明を敬するなり又君に忠に人に  
義に親に孝もこの心にこもりたりとしるべしあゝ大いなるかな

あら浪をしのぎてたてゐるいはの上

さけるさくらを鏡とはせよ

○油断と慎み

友 の 中 陣

古語にも油断は大敵とす家を守るには火の元に油断なし士は勤めは油断なし農人は  
耕作に油断なし職人は持に油断なし商人は渡世に油断なく番人は盗人に油断なく禿頭  
は潜り戸に油断なく猪首は雨だりに油断せず手習子は坂に車の油断なく犬は盜賊と紙  
屑拾ひに油断なく鼠は猫と黽に油断せず猫は犬と魚なに油断なく雀は鳥さしに油断な  
く鶴は鷹に油断なし鳥獸さへ油断なし況んや人間に於てや油断怠らず守るに如かず  
人は世嗣をまふけて子孫の榮へんことを主りて亡る事を慎み臣は忠義を主りて喰漬と  
なることを慎み百姓は豊作を主りて不作ならんことを慎み商人は金まふけを主りて損  
なきことを慎み馬は荷を負ふことを主りて腹太鼓を打事を慎み牛は耕作の助となるこ  
とを主りて黒關から引出さるゝことを慎み犬は門を守ることを主りて喰付ことを慎み  
猫は鼠を取ること主りて籠に糞すること主りて猫は時を告ぐることを主りて鍋焼と  
ならんことを慎み鳥は夜明を觸るゝことを主りて口ゆへ憎まれんことを慎み禽獸と  
雖も主りて慎む所あり況んや世の中の人五常の道を守るとを主りて其獨を慎まざるや

## 武士と坊主の口論

某地に一武士あり網を郊外に張りて鳥を捕ふ一老僧あり突然横道より來りて網の前を通る武士大喝して盜坊主と呼ふ老僧佛然として怒り無禮の言辭を武士に詰る武士夷然として曰く我れ奚んすれぞ盜坊主と謂はん突然網前に來りたるを以てヌツと坊主と呼びしなりと僧嫌らざる顔して去る武士更に大叱して氣違坊主と呼ふ老僧復た歸り來り怒顔罵聲其過言を責む武士平然として曰く我れ奚んすれぞ爾か謂はん汝ぬつと謂ひしを盗人と聞き謬れり故に我れ呼んで聞違坊主と謂ひしなりと老僧呆然として去れり

## サイラス王と少年の騎兵

サイラス王の麾下に一少年の騎兵あり或日の劇戦に非凡の功名を揚げて王座に近く其戦況を語らんと駈け來りぬ乗りたる驍騎はヘルシヤ軍中無雙の駿馬なりし今日の勝戦には嘶く聲も一際人耳に聳へ天晴三軍の逸物よと喝采されぬ王は戦況を聞き畢りて少年に詔せるは汝は其乘馬を予か一郡と交換するを許さずやと少年俯首して曰く詔命敢

## 友の中陣

て拒む所に非らず然れども臣は邊境に生れて未だ一人の親友も候はず只た此馬のみは慈父か臣に贈れる一親友にて彼れなくは我進まず我ならては彼れ駈け候まじ臣の微忠を致す所以のもの此親友にあらざれば能はず是のみは御許させ玉へと答へければ王も理りなりとて戦功として一郡を賜はりたりと

## ○徐セフ二世と賤しき少女

徐セフ二世或る日維納府の一小公園を微服して逍遙せられ玉ひけるが未だ二九にも足らぬ一少女か細き腕には得堪はずして左も骨折れる様子に井水を汲み居るを見懸け玉ひぬ陛下は少女の已を知らざるこそ幸なれと何げなく近寄り問ひ玉ひける様水をば何の用に汲み何處まで運ひ行くぞ又御身の家は何の稼業なるぞと少女は親切なる問ひに答へて云ふ妾は御覽の通り賤しきものなり日々此水を汲みて市中の家々に配はり僅かなから汲賃をば貰らひ侍るなり妾の父は王室附の馬丁にて侍れどそれとて極めて微なる給料なれば母一人子一人の家にて侍れ人並の生計も立て難き儘父母か手助にもと

## 友の中陣

水汲み勤をば勵み侍るなりと陛下は痛く此答に憐みを催されとは中々につらかるべし。明日は早く王宮迄御身の父と來り玉へ惡しからず今上陛下に世話し參らすべしと少女は嬉しき人の志やと思へど頓がて答ふる様御志の程は悉く侍れども其事計りはとても覺束なきこと存し侍れ豫ねく父なる人の語れるには今上陛下は下々の百姓より金を取り立て玉ふこと知らるれど我等に金錢を賜はる様なことは知り玉はずと申して侍るもの左れば明日それ等の御周旋なし下さる代りに今日妾か頭に此水桶を擡ぐる力を貸し玉ひねと陛下の手を借りて水桶をば戴きて歸りぬ陛下は少女を見送りて憮然として歸殿し玉ひたり翌朝早速馬丁の少女を召出し玉ひぬ少女は何事ぞと取るものも取り敢へす急き王宮に參しけるに難かて玉座に現はれ玉ふは昨日井戸端にて我か水桶の手傳しける人なりければ少女は夢の如く昨日の無禮と失言とを思ひ出して色青ざめ手足震はせて跪つさぬ陛下は氣の毒さに少女の手を執りて慰籍し玉ひ昨日約せし通り其方か母には今日より一ヶ月拾フロン苑の手當を與ふべしと内藏頭に命し置きたれば心

## 友の中陣

安くせよこれよりは朕か馬丁の少女には水を汲ますまじ只た以後は昨日朕に物語りしより猶ほ打解けて話しに來るべし朕も一國士庶の主領なれば其方か父とも思ひ決して天子は我儘なる暴君とな思ひぞとの玉ひて少女をば歸されける

## ○花は衛生

公園の管理は衛生の領域であると云ふことは官衙に於ける分課の規定を見ても分るか此公園に花を觀月を賞し綠林影靜かなる所青草露深き所彼處此處を逍遙するは實に衛生上稱すべきことである

暮るとて戻るな花に月もあり

杯は清遊と見て宜しけれど花觀る衛生が花見酒に酔どれて不衛生となることかあるから吾人は秋色女史の

## 井の上の櫻あぶなし酒の酔

と詠れたのは實に衛生的の意味も充分に含まれ居て結構至極の名吟だと思ふ遺難豫防

の名句だと思ふ

○山椒さんしやうと日本の兵士

是まで日本人は身體からだが小さいから、とても外國人には及ばない。體格の小柄なるは強壯しやうさうて無い、外人は體格が大きいから強壯であると、日本人自身もサウ思ひ、外人も爾しか思つて居た。所か今回の戦争で、體格の大小は強壯の測度そくど標ひょうて無いと分つた。千八百十三年のライプチヒの戦争は三日間さんじつかん繼續つづしたので、精力がよかつたものだものと驚かれて居るか、今回の奉天の大戦には、二月二十七日から三月十二日までまに亘り、十四日間劇戦げきせんかついた之に對手たいてになつた露兵も強いが、矮小わいせうだと輕視けいしせられて居た、日本兵の體力の強壯と、精神の旺盛わうせいなどは、儲たくわかに外人をして、小柄だとして馬鹿には出來ないと賞賛しょうさんさせ、日本人自身も小さくても剛ごうひと覺さる様にならしめた。俗言じやくごんだか、昔から山椒は小粒せうりゅうでもひりりと辛からひと言つたか、日本軍隊の兵士は山椒である。

友の中陣

大男おほおとこ總身そうみに智慧ちゐかまわりかね

とは露兵のことだ、日本の名將であつた、義経でも秀吉でも、皆んな小柄であつた、日本軍人萬歳

○日本刀の話

わが國の刀劍は實に世界に類のない一種の特有物である、工藝技術の進歩發達は西洋に及ばぬやうであるが日本刀ばかりは千年も前より非常に進歩して、世界各國どこでも日本には叶はない、であるから廿七八年の戦争の時でも、三十三年の聯合軍の時でも日本の兵はこの利器によつて功名を著はしたものが多おほいのである、今度の滿洲軍もその通りみな日本刀をさしてソレ斬きこめと云ふときは真向まへむかひにふりかざして縦横無盡じゆうけいむじんに切つて廻る、實に日本刀の威力と云ふものは非常なものである、ソレで私は日本刀の事に就て少々話を致します日本刀の初りは非常に古いから今日に残つて居る刀で千年位前のものがいくらもある、また元暦年間平家の時代のもの建武年間足利時代のも

友の中陣

## 陣の中 友

のも澤山にあるがいづれも美術的のもので戰場へ持つて出るには適しない、なぜと云ふに古い物は十中の七八焼刃が細くなつたり鐵がスガレたり、いたして皆な弱つて居る、其中に新刀の如く立派なものもある、けれども此等は高價なものでたやすく得る事が出來ぬ、マツ正宗の門弟で志津の三郎、長船の長義、秋廣、左文字、など、云正眞のものを手に入れやうとすると少くも百圓より貳三百圓出さねはならぬ、備前物ても應永年間以上(足利の三代目)の物では四五十圓以上三四百圓まであるから古刀はなか／＼得かたい、また之を手に入れたところが魯國の兵卒などを斬るには惜いもので、敵の大將でも打取るなら格別無闇に斬つて廻るには古刀より新刀がよい、新刀でも堀川の國廣、虎徹、などと來ては容易にありません、在つても偽物が多い、偽物でも切れ味はよいに違ひはないが、マツ其は別問題として今度の軍に用刀はどんなものがよい、たしかに切れる刀は何であるかと云ふ事を逃ませう、マツ大業物と云つて鐵でも石でも切れると云ふものは第一に虎徹、それから大坂の井

## 陣の中 友

上眞改、京の堀川の國廣、大坂の津田助廣、肥前の五字忠吉、近州の津田助直、栗田口忠綱、一竿子と云ふはこれである其から備中水田の國重、京の丹波守吉道大坂にも同名がある、河内守國助、近江大塚忠廣マツこれらが新刀の上々作て其より澤山あるが備前の祐定と云は上作とは言はれぬが折れもせず曲りもせずさうして切れる事受合と云ふ刀である祐定は與左衛門祐定と云が初代でこれは永正年間の人永正祐定と云つて非常に切る、其よりだん／＼續いて六十余人ある、その中で永正と天正の年號のあるのがよろしい

すべて右に擧げたのは初代の名人であるが其門人でも上手の者が澤山あつて新刀の鍛冶は幾千人と云多數であるから世上に名の知れぬ鍛冶でも随分切れるのがある、例へば兼と云字の名は關の鍛冶に多いがこの兼何と打つた鍛冶は何百人とある皆なよく切れます、關物と云つて見掛はわるいけれども實地に用ひては實によろしい

さて軍刀にするに自分の腕力に叶つたのを選びでこれ位のが違つて丁度よいと思ひ

力相應の目方の刀を帯ぶるが一般の人の習ひであるがこれはいけないのであります。平日太平無事の時とイザ戦ふと云ふ時と人間の腕力は非常に相違のあるものでどんな事でも必死となつた時には軽くなつて仕舞ふ、僕は水戸弘道館の戦ひにも出た、上野の戦争にも出る、函館の五稜廓でも戦つて實地にやつて見たから刀を執つて敵に向つた経験は誰よりも多いのである平世にして腰の工合のよいと思ふ刀はイザと云ふ時は軽くなつてペラ／＼して仕様がないうねの厚い巾の廣いたッぶりした重い刀でなくては思ふやうに切れない、僕の友人で戰場へ出た者は皆な同感で、だから諸君はなるべく重い巾の廣い丈夫な刀をね持たさい

六 俗 語

七十八翁大高義英入道岩齋述之

幼いときからいろはにほへと

横濱の花子

散れとをしへた甲斐がある

朝日に匂ふ山櫻、散るををしまぬ四十萬騎向ふところに敵なきは當然のこと

君がためならなにをしかるふ

なにがし

散りて甲斐あるやまさくら

今一度眼見ひらけねむれる友よ

久米仙子

敵の砦に日の御旗

日本てるてるロシヤはくもる

坂輪照子

満洲にやアあられと丸が降る

子なく親なく妻なき身には

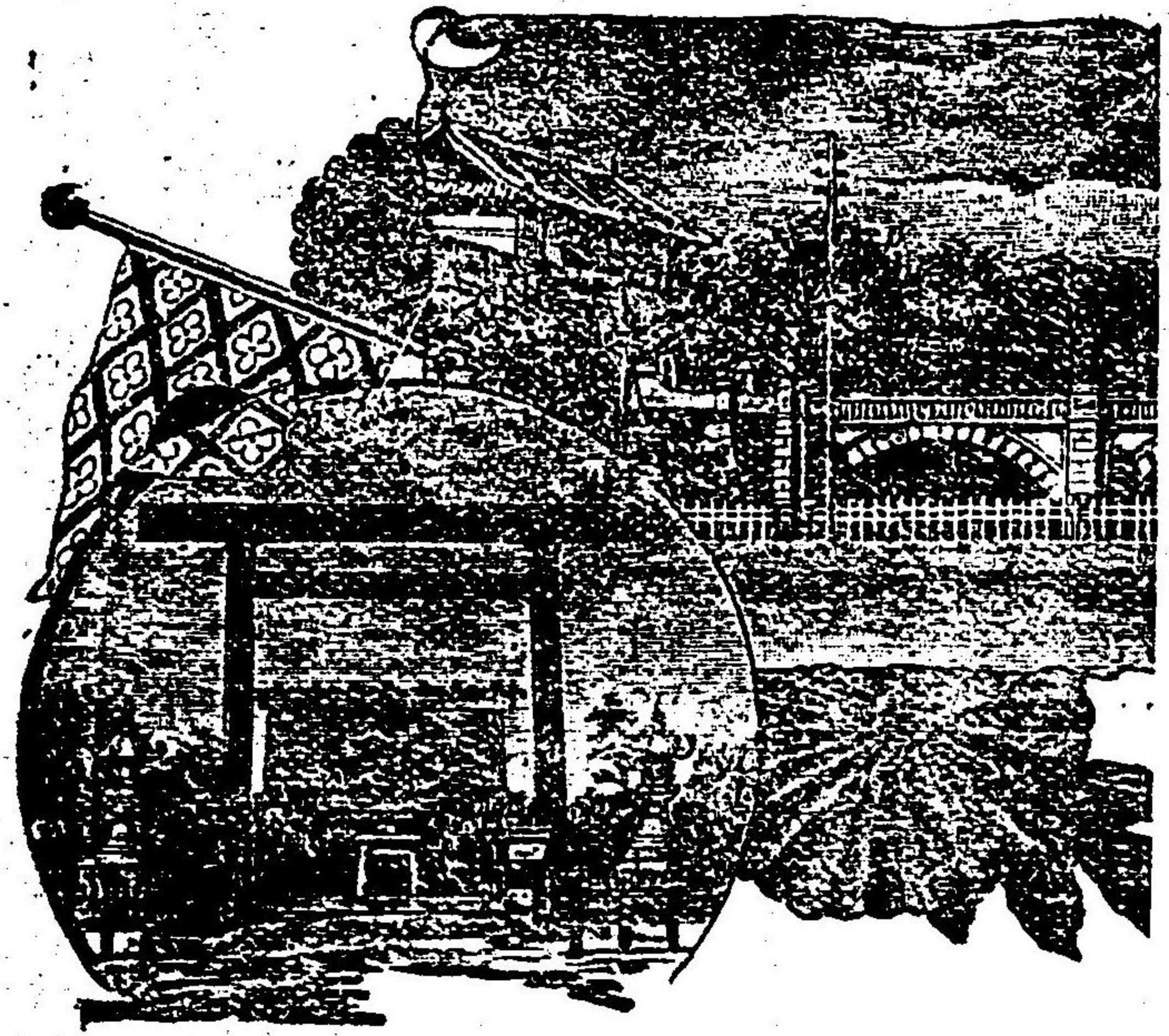
北井みと子

敵にかちたるゆめばかり

海にも陸にもまけたるロシヤ

越智星子

友の中陣



いまにいまにと空だのみ

榊原蝶子

上る朝日のうらるの山に

さくらさかすもちかうち

南波浪子

月にうかれて荒野を行けば

敵の陣屋に笛の聲

宮城

はるかに皇居のゆめを見て

おきて東をふしれがみ

靖國神社

倒れし戦友だきれこし

耳に口あて 手をにぎり

「九段の上にてまた逢はむ、安々眠れ」

と眼になみだ。

蝶よ花よとそだてたむすめ

今か舞ひ時なかめとき

(此のあと御つけ下され度遠征勇士諸君に乞ふ、御作は中外圖書局編輯所にて歓迎仕候)

○女と戦争

第五章 戦争文学

友の中陣



神功皇后 三韓征伐

大葉子 新羅王吾しりをくらへといつて殺された、伊企難の妻、夫と同じく新羅にとらへられて「からくにの、城の邊に立ちて、大葉子は、領巾をふらする、日本へむきて」とよんでころされた。

上毛野形名の妻 夫の太刀をはき其の弓をとり蝦夷を撃退く

巴御前 義仲の妻力強く常に一方の大將であつた、

静御前 義経の妻 頼朝の前でためせず「静やしづしづのをだまきくりかへし昔と今になすよしもがな」とよんだ。

木村重成の妻 唐の項王とやらんは、世に猛き武士なれど虞氏の爲めに名残りを惜み木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら、されは世に望み窮れる妻が身を、せめて御身御存生の中に最期を致し、死出の道とやらにて奉待上候必らず、秀頼公多年海山の御恩御忘却なき様願上候」とかきのこして自殺して夫をはげました。

友の中陣

奥村伊豫守の妻 夫とともに末森城を守り、佐々成政の大軍をしりぞく、山名宗全の妻 敵將の間隙忍び入りし時刀のささへ着物をかけて、夫に加勢し、夫をして間隙三人をささり殺さしめた。

○蜂谷半之丞が母の事

二連木の合戦に本多平八郎、牧宗次郎槍を合けるに、蜂谷半之丞少しおくれたりしが、蜂谷早とく槍は合たるに、いかにといふ者ありしを、半之丞聞て他人槍をしたらんに我は切合をよといひすて、刀を掲げて敵の中へ飛込て二人なき伏たるに河井正徳といふ者鐵砲をかまへたる、所に走りかゝる正徳かくれなき手だれにてうちたるに痛手なりしに起あがりてそこをば引とりたれども蜂谷つひに死しけるとぞ。蜂谷の老母は蜂谷が痛手なひたると聞いていかに首尾のありつるぞと問ふ。其様これ／＼なりと答れば嬉しや士の戦場に出で矢玉にあたるは常の事なりもし手負さまのあしかりせば死すとも冥途に面目なかるべしといひけるとぞ戦國の時婦人の身も弓箭とる家に生れ

友の中陣

たるは志す所大にことなるもの想ひみつべき事なり

○中島元行が母備中經山城を守る事

尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀駿河に兵一萬をそへて備中經山の城を攻させける此城は中島加賀守が子大炊助元行が守る處なり元行僅かに二百許の兵なれどもちつとも恐れず頼宮次郎左衛門鷺見九郎二郎に百姓ばら二百人をへて寺屋敷といふ地に伏せ阿部左衛門二郎鷺見五兵衛は鬼ヶ城といふ處にかくし置けり敵侮ておしよする時門を開て打て出て相圖の具をふけば鬼ヶ城の伏兵後よりまはり又頼宮等百姓に紙旗を立てせ竹槍をもたせ關の聲をあぐる尼子が軍兵共前後に敵有とて助け合んとすれども道細く谷深くなだれ落ちてみだれけりされども攻具を設けとりかこみしに元行が母物の具の上に羽織を着刀を横たへ女房二十人計相具し元行本丸にある時は母出丸を巡り元行出丸を巡れば母本丸を守りて士卒の怠を戒しむ或夜風雨甚しかりければ元行百人計にて夜打に出半を道に伏置たり、かくて亂れ入關の聲をあげ火をかけて靜かに引て返る處に敵

友の中陣

追來れば思ひもよらぬ徑のかたより伏兵どつと起りて敵三百餘うち取たり、元行に防がれて尼子の軍引返して復攻むる事なかりけり

○山内一豊馬を買はれし事

山内土佐守一豊其はじめ織田家に仕へたり東國第一の駿馬なりとて安土に牽來てあさなふ者あり織田家の士是を見るに誠に無双の駿足なれど價あまりに貴しとて求む入らなくいたづらに牽て歸らんとす一豊其比は猪右衛門といひしが此馬望に堪かねたれどもいかにも叶ふべからざれば家に歸り身貧さほど口惜き事はなし一豊奉公の初にあつばれかゝる馬に乗りて家形の前に打出べき物をとひとり言しければ妻つくくくと聞て其價はいかばかりにてか候と問黄金十兩とこそいひつれと答ふ妻聞てさほどに思ひ給はんには其馬求め給へ其料をばまゐらすべしとて鏡の奩の底よりとり出して一豊が前にさし置けり一豊大にちどろき此年ごろ身貧しくて苦しさ事のみ多かりしに此金ありともしらせたまはず心強くも包み給ひけん今此馬得べしとは思ひもよらざりきとて

友の中陣

且は悦び且は恨む妻仰の旨ことわりにてこそ候へさりながらこれはわらは此御家に参りし時父此鏡の下に入給ひてあなかしこよの常の事にゆめく用ふべからず汝が夫の一大事とあらん時にまゐらせよと戒めたまひ候きされば家の貧しきも世の常なれば堪忍ても過ぬべし賊に今度京にて馬揃あるべしと承れば此事天下の見物なり君も又つかへの始なりよ馬召て見参せまうさんと存候てこそ奉るといふ一豊悦ぶ事限なく頓て其馬求めてけり程なく京にて馬揃ありし時打乗て出しかば信長大にれどろきあつばれ馬やとて事の由聞給ひ東國第一の馬遙にわが方にひきて來りしを空しく歸さんは口をしき事多とよ、それに年頃山内は久しく浪人して有しと聞家も貧しからんに求め得たるは信長が家の恥をすいぎたるなり弓箭とる身のたしなみ是に過たる事があると感じて是より次第に用ひられしとぞ

○幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝秀吉と弓箭をとる時信孝の乳の人を人質に秀吉のもとに出し置れしを疎にし

て誅せらるかの乳の人の子は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり是より前秀吉信孝の長臣等をかたらはるゝに岡本下野守は同心して信孝に背きけれども幸田は背かず母誅せらるゝに及て子の彦右衛門に書を送りて我空しく成ることゆめく歎くべからず親は必子に先だつ習なり唯忠義を守りて君にな背き参らせぞと言遣はしければ聞人感じあへり天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に責入る時幸田兄弟いさぎよく討死したりけり幸田が母は實に漢の王陵が母の志とも云つべし但し王陵が母は天下をしるしめすべし高祖の事を識たれども只今危難に迫れる織田家に忠を盡せといへる真にありがたきことなるべし

○長岡肥後が妻節義に死する事

細川忠興豊前に在し時同國龍王の城に飯河豊前宗祐祿三千石岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石宗祐の子龍せられて長岡の姓を與へられしに父子とも罪ありて慶長十一年七月二十一日二人とも誅せらる宗祐は河北石見逸見治左衛門を討手とし宗信は増田藏人

を討手とせらる宗祐散々戦ひて死傷多し宗信が妻は米田助右衛門是政が女なり宗信と睦しからず對面せざる事三年に及びり忠興是政が後室の尼雲仙院といへるをよびて豊前肥後罪有て誅すといへども汝が女と孫の女に罪なし密かに告知せて命を助けよとなり後室の尼聞て肥後が妻常に中よからず然れども夫をすてゝかゝる時にのかれんとは得もこそ存まじけれど仰の忝さをば告申さんとて文して告げやりければ誠に仰は忝けれど今はのきはに夫をすてゝ遁れん事人道にあらず女子は東西をわきまへざる者なれば養育して給はれとて使につけて尼のもとに送りけり宗信是を聞て大に悔み我過を謝し終に共に自害したりけり

○大久保家の婢女主の仇を撃し事

大久保長門守教寛の内所に奉公せし女中老ある時心得過ちし事ありしを女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ中老親にもたゝかれし事はなきものと獨言して部屋に歸り文書て下女にもたせ親のもとにやりぬ二人の下女一人は残りなんといふを大事のこと

いやる文なりとてれして二人とも出しぬ道にてあやしき事上常に二人一度に出されし事も覺へず顔色も只ならず有しとて文を披き見るにしがくの仔細にて自害するなりと書のせたりさてこそ有べければとて一人はとくゆかれよ我は歸りておしといひべしとて急ぎ歸りて見るにはや自害して有しかば夜の物打かけ小脇差の血を拭ひ我懐にさしてさあらぬ體にて年寄の部屋に行き語り申度事候只今部屋に來られよといひしに程なく行べしといひければ歸りてはまた行き數度に及びしかば年寄來りて夜の物をあぐれば朱に染て中老は死してあり其時女房これは今日の事にてかくは自害に及びたるなり主の仇よといひもあへず小脇差を抜て刺殺しけり兩人を殺したるならんとらへて糺し問るゝにふところより文をとり出し證據はこれにて候と始終を詳にいひ述べて主の仇をば討留つ思ひおく事なく候とてさわぐ色もなし長門守女中を殘らず並べて彼中老の下女の事いかゞ思ふにやと尋ねらるゝに忠義といひ氣なげなる事といひ驚き入たるよし口をそろへていひければさらばいかゞせん各々存する旨を申候へとありしかば

存じよりたる事の候へきと申すさらば此度の次第はむるに詞なしといふべきなり年寄の死して事もかけぬれば則ち年寄に取立て然るべからんとてよび出して賞せられけるときぞ



○ナイチンゲール（赤十字旗の由來及年代等に就て）  
西曆千八百五十三年から、千八百五十六年まで、即ち四年間に亘り、英佛二國が聯合して兵を起し、露國と戦ひたるが、其中クリミア役は實に有名な大戦争であつて、兩軍死傷は山の如く、殊に疫病流行し、屍は山野に充

満し、其慘状目も當てられぬ程であつた、時に、英國の貴嬢にナイチンゲールと云ふ、看病學に通じ、病者の取扱に熟練した人が。クリミアの慘報を聞きて、雄志禁する能はず。即ち同志を糾合して、一救護團を組織し、遠く山海を踰へて戦地に赴き、傷病者を救護したり。陣中呼んで神の使とせり。事を終へて英國に歸りたる時は、凱旋の將軍を歓迎するよりも盛んなりしと。嬢は戦役の非常の辛苦艱難を重ねたるより、爲に大に身體を損じ、終に病身となれるを以て、英國の有志は貳拾萬圓の贖金をなして、養老金に供したるが、嬢は此金を以て一の看護婦學校を設立せり。龍動の「セン

トトーマス」病院に屬するナイチンゲール看護婦學校是なりとす  
腫て千八百五十九年、澳國と佛國と戰を開くに際し、瑞西國の人ヘンリー、デユナント氏、戦況視察の爲に戦地を實踐したるが、同年六月二十四日ソルフェリノの戦は、兵數三十萬、戦争十五時間に亘り、死傷者原野に充滿したる慘状を目撃して、「ソルフェリノ」の紀念と題する一小冊子を刊行し、世に出せり。爾來百難を排し、萬艱を忍び、

千八百六十三年二月六日、同志僅に五人にて、救護會設立の社務を商議したるが、同年十月廿六日に、七ヶ國の國使として國の國書と三十六人の有志家相集り、會同商議し、翌六十四年八月二日、條約十ヶ條を議決し、十一ヶ國の政府之に誦盟するに至れり。而して此の會盟は、瑞西國の都ゼネーヴにて取結びたるが故に、ゼネーヴ條約と名づけ、又其標章は瑞西國の國旗赤地に白十字なるを裏返しにして、白字に赤十字を用ゆることとせり。左れば赤十字事業はクリミヤ役に於けるナイチンゲール嬢に發して、ソルフエリノの役のヘンリー、デユナント氏に成り、瑞西國之れが盟主となりしものと謂ふべし。(天賦)

第六章 陣中衛生の心得

(陸軍省調)

一 身體衛生心得

(一) 指疽菌痛など、身體に些少の障ありても、自由の働きを妨げ戰闘力を減ずるものなり。而してこれ等は多く自身の無性より來るものなれば、戰時と雖も身體各部を

清潔に保つことを怠るべからず。

(二) 戰時には入湯出來ぬこと多ければ、時々冷水もて全身を拭ひ、汚垢を去るべし。

腋窩、内股、陰部などは殊に丁寧に拭ふべし。

(三) 髪は短く切りて時々洗ひ、頭瘡、頭虱などの出ぬやうにすべし。

(四) 毎朝口を嗽ぐ時には必ず善く齒を磨き、虫齒の起らぬやうに用心すべし。

(五) 手は使用多きため汚れ易く、随つて皮膚症に罹り易きのみならず、これを介して

病毒を體內に持込むことあれば、石鹼もて屢々洗ひ清むべし。

(六) 足は手と同様不潔になり易く、且靴の爲めに蒸れて一種の汗臭を放ち、靴傷の原因と爲るものなれば、宿營に就く毎に必ず洗ひ清むべし。馬に乗るものは内股と臀部

とを善く洗ひて鞍傷を防ぐべし。

(七) 爪垢の中には、種々の病毒を含むことあれば、時を以て爪を截り、垢を除くべし。

然れども餘りに深く截りて崇らぬやうに注意すべし。

八 寒時には手足の傷口、輝などより病毒の入る恐れあれば、善く洗ひ、善く拭ひて、凍傷膏（石樟軟膏）を塗り置べし。

二 衣服衛生の心得

- (一) 衣服の主なる目的は、寒を防ぐにあれども、餘りに厚着して溢りに汗を出すは害あり。労働中は寧ろ輕装し、汗も出さず寒さも覺ゆるを度とすべし。但し静止中若くは歩哨衛兵等の勤務に際しては、各種の防寒被服を用ゐて身體を保護すべし。
- (二) 外套は須要の防寒具にして、又唯一の衾褥なれば、大切に取扱ひ、若し雨雪等の爲に濡れたる場合には宿營に着きたる後速に之を乾すべし。
- (三) 襦袢、袴下、靴下、は務めて洗濯すべし。身體を清潔にするも下着の垢染みたるものを用ゐる時はその効なればなり。
- (四) 袴下の綻を繕ふときは、縫目の凸出せざるやう心掛くべし。殊に乗馬兵に於て然りとす。屢々鞍傷の原因となればなり。

(五) 服装は下腹の威脅を防ぐ效あるを以て、支給せられある間常にこれを纏ふべし。  
 六 靴下は務めて交換すべし。破れたるもの濡りたるものをそのまま穿つときは、靴傷凍傷を起すの原因となればなり。

靴下を履き盡したるか、又は靴下のみにて寒さに堪へざるときは、有合せの布片又は毛織物（フランネルならば最も善し）を細長く切りて巻附け靴を穿つべし。

(七) 軍靴は務めて軟保すべし。靴傷は管に靴の不適合に因るのみならず、その硬化に原づくこと多ければなり。軍靴を軟保せんには油脂を塗るの外なし。

(八) 硬化せる軍靴を柔軟ならしむるには、先づこれを水中に浸し、又は水に濕したる刷毛にて摩擦し、その軟化するに及びて、表面の水分を拭ひ去り、溫溶せる豚脂を日光下又は火鉢焚火などの傍に於て、靴革に吸収飽和せしむるを可とす。

(九) 靴は徒歩兵の馬なれば、これを大切に扱ふことも、亦尙乘馬兵に於ける馬の如くなるべし。

(九)靴破れて足傷かざるもの鮮し、故にその保存には殊に注意すべし。濡れたる靴を火にて急に乾すことは、保存上に害あり、宜しく熱したる藻又は温めたる毛織物の類を其中に詰め、遠火にて徐々に乾すべし。

(十一)途中靴破るゝも替靴なきときは、足部を枯草、打葉等(真綿あらば最善し)にて厚く包み、布片もて幾重にも巻付け、其の上に草鞋を履くべし。

三 飲食衛生の心得

(一)體力の本源は食物にあり。戦時體力を勞すること大なるを以て、食物を攝るの量も亦大ならざるときは、疲れて思ふ様の働さを爲し能はざるのみならず、寒氣にも得堪ずして、種々の病を惹起すに至る。故に戦争には殊に十分に食ひて、空腹を覺えざるやうにすべし。但し過飲過食は總て害あり。

(二)疲勞甚しきとき、又は身體熱せるときは、暫時休息の後食に就くを可とす。

(三)副食品にして、苟も腐臭を放つもの、又は變味を覺ゆるものは、一切食ふべからず。

ず。

(四)成熟したる果物は、多少の食素を含み、且渴を醫する效あれば、善く皮を去りて食ふは差支なけれど、未熟の果物は下痢を起し易きが故に、戒むべし。赤痢虎列刺等の病あるときは殊に然り。

(五)生食物、生水の中には、往々恐るべき病毒を含むを以て、そのまゝに飲食すべからず。

(六)從來使用しある井水、水道の水、清き溪水、涌泉等は、皆飲用に供すべきも、可成一旦煮沸したる後に於てすべし。



(七)古井、池、沼等の水は、縦令煮沸後と雖危険なきを保せざるが故に、止を得ざる



場合の外飲用すべからず。

(八) 敵の遺留せる飲食物、新たに占領したる土地の井水民家の貯蔵食品は溢りに口にすべからず毒物を混ざるの恐れあればなり。

(九) 茶、咖啡、等の飲料は情氣を挫つゝの效あるを以て、疲勞を感じたる時に用ゐるを良とす。煙草も亦然り。

(十) 酒類は適度にこれを用ゐるときは、疲勞を醫し、元氣を復するの效ありと雖、過飲するときは大害あり。慎むべし。

凍傷、凍死、日射病、中熱病の豫防の必要ある間は、可成飲酒を禁ずべし。

四 行軍衛生の心得

(一) 出發前日、靴及靴下を整頓し、身體を清拭し、飲食を慎み、務めて熟眠すべし。

前夜淫宴に睡眠足らざるものは、途上疲勞を感ずること甚だしく、且凍傷日射病等に罹り易し。

(二) 出發の際結ぶべき紐は固く結び、掛くべき控釦は漏なく掛け置べし。寒時途中にて氣附も手凍えて自由ならざることあればなり。

(三) 出發の際は必ず水筒を充すべし。これには可成煮沸水若くは茶を盛るべし。

(四) 行軍中は歩度の終始平等ならんことを努め、俯首して行進することを避くべし。斜面を登り、又は寒風に向ふときは、多く談話せず、且喫煙せざるを可とす。

(五) 萬止を得ざるの外は伍を離るべからず。伍を離るゝものは追及の爲めに駆歩す而して斷續する駆歩は、大に疲勞を促すものなればなり。

(六) 行軍中飲を節する習慣を得んことに努むべし。渴すれば即ち飲むの惡習を成せるものは、飲むに隨ひて渴を覺ゆるものなればなり。

(七) 身體熱するに乗じ、一頓に大量の冷水を飲むは害あり。往々爲めに死を致すことあり。故に先づ口中を潤ほし、後徐かに少量づゝ飲むべし。

(八) 途上渴を覺ゆるも、氷塊又は擲雪を口にすべからず。却て渴に煩ぶものなればなり。

九) 休憩時には襟を閉じて安息し、其間頭部を直接日光に曝すべからず。  
 十) 熱せる身體を以て直に濕りたる地上に憩ふは害あり。宜しく乾きたる場所を擇み、又は藁、枯草、木枝等を敷きてこれに座すべし。

十一) 休憩の際は必ず足を點検し若し、潮紅する所あらば、軍醫に請へて靴傷膏(石樟軟膏)を塗擦し、又は足粉(雲母八七分、楊皮酸三分、澱粉十分より成る)を撒布すべし。

十二) 休憩中特に靴下に注意し、皺を伸し、若くは左右交換し、濕りたらば履易ふべし。

十三) 休憩中濕布を以て足を摩擦し、水にて手、顔面、項部などを洗ふことは、氣力を復し、疲勞を散ずる一手段と知るべし。

十四) 休憩中飲を欲するも水を得難き時は梅干を口に噛みしめし、梅干なき時は樹の葉

四) 朝鮮及支那の民家には、便所の設なきを以て、これに合營せんとするときは、幹部にて假便所を設くべけれど、間に合はぬときは、各兵自ら穴を掘り用を辨じたる後、自身に埋没すべし。地表に糞尿を放ち、蒼蠅を集め、病毒傳播の媒介を爲さしむるやうの事あるべからず。

五 宿營衛生の心得

一) 天幕内に宿營する時は、雨雪天の外は、晝間幕を開き、風を通ずべし。溫暖なる氣候に於ては、夜間と雖、處々開放し置くべし。

二) 敷藁、枯草、眞葉等幕營内の臥床用に供せるものは、時々取出して日光に曝すべし。

三) 携帶天幕を運んで幕營を設くるに方り、氣候暖かき時には、開散幕營法を取り、寒き時には密集幕營法に依るを利ありとす。剩餘の幕は地上に敷きて濕氣を防ぎ、又足に纏ふて寝に就くを可とす。

(四) 冬季露營に際し、足は殊に寒を覚え、且最凍傷に罹り易きものなれば、靴下を重ね靴上より藁繩などを巻き、外套を纏ふて寝に就くを可とす。

(五) 積雪中に露營を布くときは、雪上に臥すべからず。是縦令雪を踏固むるも、自然に融解して衣服を湿ぼし、體温を奪ひ、恐るべき凍傷若くは凍死を招くことあればなり、故に地上の雪を除きて、これを周圍に堆積し、雪の堤を築きて掩蔽となし、其中に臥すべし。入口は風に反する側にこれを設くべし。

(六) 便所の注意は舍營に於けると同じ。

六 行軍病豫防の心得

行軍中軍隊に多大の損害を與ふる疾患は、靴傷凍傷及腸病なれども、靴傷の豫防に就ては、身體衣服等の部にて、略ぼ述べ盡したれば、左に凍傷と腸病との豫防心得を示すべし。

其一 凍傷

(一) 凍傷の起り易き部位は、手、足、耳、鼻、口等の尖端部にして、血の通ひ悪く、隨て營養の乏き處とす。故に冬季寒地に行軍するときは、此等の部位に深く注意し、且手足には出發前に凍傷膏(石樟軟膏)を塗り置くべし。

(二) 凍傷及凍死の根本的豫防法は、適當なる防寒被服を纏ふの外、營養を充し、夜眠を缺かざるにあり。睡眠足らざるときは運動に懈く、活氣に乏く、營養足らざるときは、體内の溫氣薄く、外襲に對する抵抗力衰ふ。即ち皆凍傷若くは凍死を招くの本となる、故に寒時には殊に十分に食ひて、腹を満し、又時の許す限りは、熟睡することに努むべし。

(三) 酒を飲むときは一時皮膚の溫氣を覺ゆとも、體内の溫度は却つて降り、又爲に睡眠を催して、凍傷若くは凍死の原因となるものなれば、その恐れある間は、決して之を飲むべからず。

(四) 凍傷凍死の豫防上缺くべからざるは運動とす。これが爲に氣血よく運行し、身體

増加すればなり。故に歩哨勤務の如き、一地に佇立する時と雖、勉めて足踏等の運動をなすべし。

(五) 摩擦も亦局部運動の一種なり。故に寒氣の爲め耳、鼻、手、足、等に感覺を失ふことあらば、是凍傷の前兆なりと心得、頻りに之を摩擦すべし。

(六) 頭巾、手套及靴下は、皆凍傷の豫防具なり。苟も破綻あらば、必ず繕ひて之れを用ゆべし。

(六) 裸手、殊に濡りたる手にて、氷冷の金屬に觸るときは、忽ち凍傷を起すことあり。注意すべし。

(八) 最も多く凍傷に罹るは足なり。是靴下濡りて、足と共に凍結するに因る。故に其豫防上最も必要なるは、水氣の靴内に浸入するを禦ぐにあれば、川を涉り雪を踏む等

總ての場合に於てこれに對する用心を怠るべからず。若し猶外より水入り又は足汗のために靴下濡らば、休憩の間にこれに履易ふべし。

戦勝の秘傳は足にあり、と古の名將言へり。足の保護には最も深く注意すべし。

(九) 陰莖の尖(龜頭)も凍傷に犯されることあれば、放尿後等に袴の控紐を掛ることを怠るべからず。

(十) 凍傷の起らんとするや、初め局部に寒冷を覺わたるもの、今は痛楚を感じ己にして全く知覺を失ふ。是凍傷の第一期とす。此凍に際し火に暖を取るは害あり。宜しく

雪若くは冷水に浸したる布片を以て、頻りに局部を摩擦し、善く拭ひて凍傷膏を塗り置くべし。

凍傷尙進むときは、局部の皮膚變色し、且水泡を生ず。此時速に軍醫の治療を受ければ、大事に至らずして癒ゆるものとす。

(十一) 戦友中總身硬くなりて途上に倒れ、將に凍死に陥らんとするものあるときは、軍醫の來る迄左の方法に依りて、救助に努むべし。決して遽に之を温包し、若くは火邊に近づかしむるやうの事あるべからず。

- (イ) 先づ此の凍者を火氣のなま一室内に運びて、衣服を脱がしめ、雪を以て、若くば冷水に浸したる布片を以て、頻りに全身を摩擦すべし。
- (ロ) 摩擦中、四肢漸く柔かになるを見れば、之を水中に入れ、引續き全身を摩擦して、徐々に湯を注ぐべし。(若し凍者を入れるべき器なく、湯水をも缺く時は、直ちに人工呼吸法を行ふべし。
- (ハ) 湯を注ぎて微温になるに至らば、取り出して全身を拭ひ去り、再び之を冷室内に移して、臥床に就かしめ、人工呼吸法を施すべし。
- (ニ) 呼吸法恢復するを待て、温茶を吞ましめ、輕暖の衾褥中に安臥せしむべし。
- (十二) 積雪の行軍中には、雪盲又は雪目(眼病)に罹ること多し。故に行進中勉めて俯首を避け、且淡黒色の眼鏡若くは眼簾を用ゐて、日光の反射を禦ぐを良とす。
- (十三) 氷結せる河湖等を渡るときは、手を隠の内に入るべからず。誤りて水中に陥ることあるも、隠の内の手は支持の用を爲さざればなり。

其二 喝病

- (イ) 喝病とは日射病及び中熱病の總稱にして、酷暑行軍の際、屢々發する危険の疾病なり。
- (ロ) 行軍に慣れざる者、體質弱者、過勞後、並に病後の者、睡眠足らざる者、房事に耽ける者、空腹の者、口渴の者、殊に酒を飲む者は、本病に罹り易きものと知るべし。
- (ハ) 各自の守るべき喝病の豫防は、主として攝生を慎み、飲酒を禁じ、油断なく水筒を充して渴に備へ、食事と睡眠とを缺かざるにあり。其他酷熱を避くるため、出發時刻を早め、日中休止し、行軍縱隊を疎開し、負擔量を輕減し、胸を開き、風を入れしむる等の事は、隊長の命に據る。
- (ニ) 喝病の前徴は、發汗非常にして淋々顔面より流れて、眼に入り襟を潤ほし、心窩に滴り、頭部、皮膚共に熱して、呼吸迫り動悸高まり、胸部苦悶を覺えて、兩脚

震顛し眩暈して、今にも卒倒せんとする感あるを常とす。此時其旨を直ちに申告して、伍を離れ、蔭に憩ひて、先づ水を飲み、衣を開き、次に冷水もて頭を洗ひ、胸を拭ふときは、忽ち快復するものとす。

(ホ)前記の徴表あるに拘はらず、猶隊伍に列し、蹣跚行進を續るときは、發汗漸く止みて、皮膚燥き、唾液は口唇に粘り付き、心動微に呼吸淺く、遂に人事不省となりて卒倒す、手當若し後るときは、其儘死するものとす。

(ハ)戰友中右の如く腸病に罹りて卒倒したるものあるときは、軍醫の來るまで左の方法に依りて救助を圖るべし。

(1)先づ此病者を蔭ありて、風通しの善き所に運び、衣袴を脱ぎ、襦袢を緩め上身を高くして臥さしめ、病者の傍には人の多く寄り集るを禁ずべし。

(2)次に冷水もて頭と胸若しくは全身を洗ふべし、或は濕布にて全身を裹み、徐々に水を注ぎて、その濕りを保続するも可なり。

(3)呼吸若し不充分なるときは、人工呼吸を施すべし。

(4)人工呼吸を行ふの間には、始終扇子、團扇等にて風を送るべし。

(5)病者の手と足とを摩擦すべし。

(6)病者醒覺せば、多量の水を飲ましむべし。

七 傳染病豫防の心得

(一)傳染病は體內より涌出る病にあらざして、其毒必ず外より入り來りて、これを起すものなれば、相當の注意と方法とによりて豫防し得るものとす。本病の毒は大抵目に見ゆる微細の生活體なり。此物一たび吾人の身體を襲ひて適合の棲所を得るときは、忽ち繁殖して重症を起し、生命を奪ふべし。古來内外の戰役に於て、病死者の數常に戰死者よりも多きは、概ね傳染病の禍する所なり。故に其豫防に就ては、幹部の施設最嚴密なるべき筈なれば、各兵は衷心よりこれを遵奉すると同時に、銘々の注意も寸分怠るべからず。

陣 中 の 友

(二) 平戦共に好みて軍隊を襲ふ傳染病は、腸壁扶斯、即ち熱病なり。その病毒は主に飲食物を介して體內に入るものなれば、生物を食はず、生水を飲まざるを以て豫防の第一とす。本病毒は又衣服、手指などに附随して、何時となく口へ入ることなれば、務めて上衣の塵を掃ひ、下着の洗濯を行ひ、手指は可成食前に洗ふべし。

(三) 赤痢と虎列刺との病毒も、亦腸壁扶斯と同じく、飲食物を介して人に傳染するを常とすれば、これに對する豫防法も、亦大要前に異なるなし。但し未熟の果物は下痢を起し易く、病毒感染の下地を作る恐れあるが故に、此際殊に之を戒むべし。

(四) 痘瘡は支那朝鮮に於て、尙流行の跡を絶たざるを以て、縱令種痘したる者と雖も、該病者には勿論其家にも近寄るべからず。

(五) 百斯篤は通例皮膚の疵傷より入る病なれば、其流行の兆あるときは、平常には意に留めざる程の小創微疵にても、軍醫に診を請ひ、手當を爲し置くべし。又此際暫時たりとも裸足にて歩行すべからず。手袋は務めて填め居るべし。

陣 中 の 友

鼠と蠅とは該病傳播の主なる媒介者なれば、成し得る限りこれを驅除し、且飲食物に觸れしむべからず。

(六) 麻刺里亞即ち瘧は、蚊の媒介にて人に傳染する病なれば、蚊帳其他に由りて、蚊に整されぬやうに用心すべし。

(七) 花柳病とは、瘰癧下疳及梅毒の總稱にして、有毒の婦人に接して得る所の傳染病なり、支那朝鮮などの賣淫婦は悉く有毒なりと心得、苟且にも此等に近づきて、啻に其身の禍を招き耻を曝すのみならず、祟りを子孫に遺すが如きことあるべからず。

(八) 傳染性眼病中恐るべきものは、埃及眼病即ち「トラホーム」なり。是は洗面盥手拭等の共用より傳染すること多ければ、此眼病流行の兆あるときは、勉めてその共用をなくべし。盥等の不足あり共用の止を得ざるものあるときは、先づ清水もて數回洗ひ流し、然る後にこれを用ゐるべし、瘰癧に罹るもの己れの汚れたる手指にて己れの眼に觸るとは、所謂瘰癧眼に罹りて、忽ち明を失ふことあり、深く警むべし。

陣 中 友

陣 中 友 終

明治三十八年六月廿七日印  
明治三十八年六月三十日發

刷 行

陣中の友奥附

著 者 智 葉 女 史

發 行 者 兼 印 刷 所 東 京 市 日 本 橋 區 城 邊 河 岸 五 段 地 株 式 會 社 中 外 圖 書 局

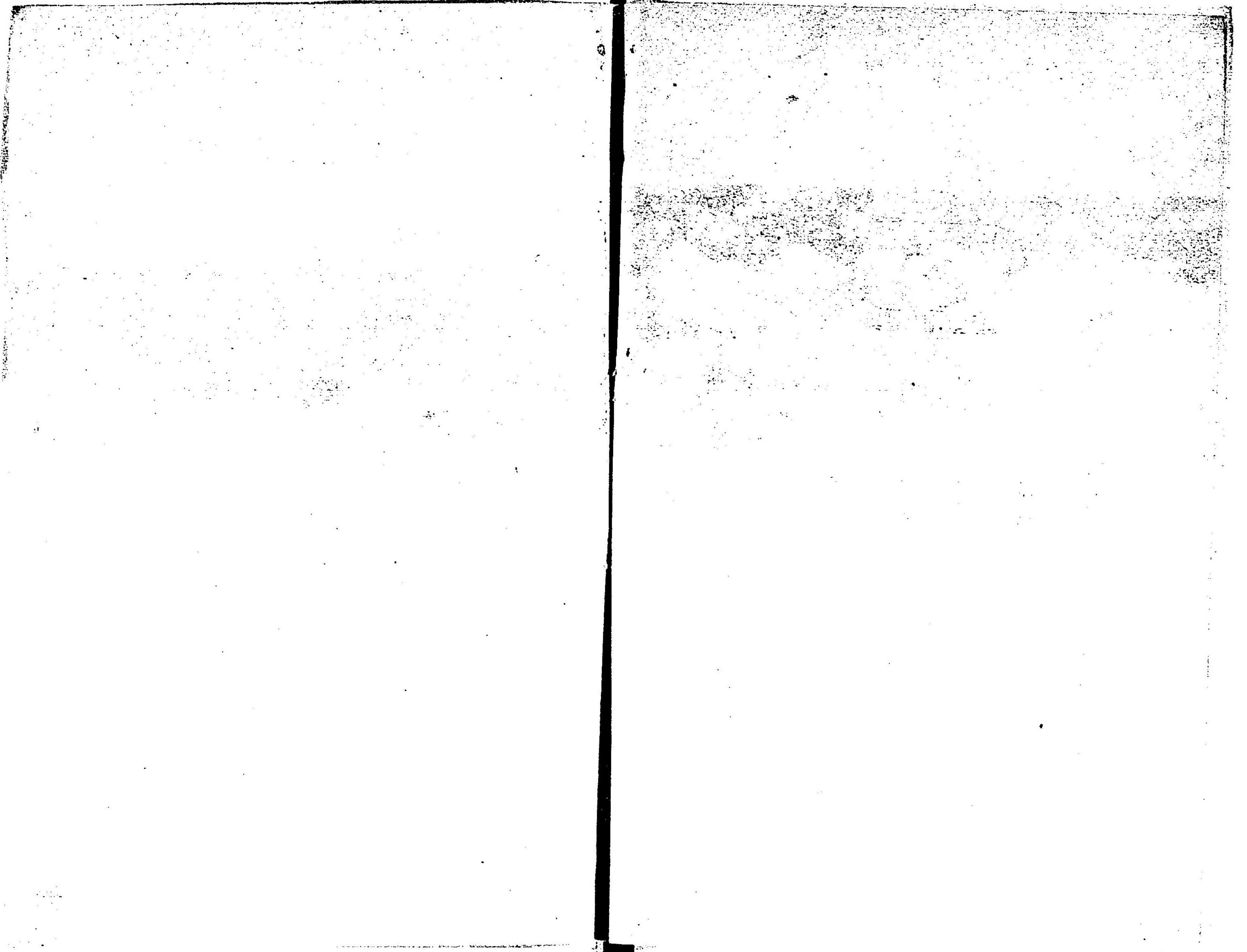
右 代 表 者 專 務 取 締 役 高 瀬 眞 卿

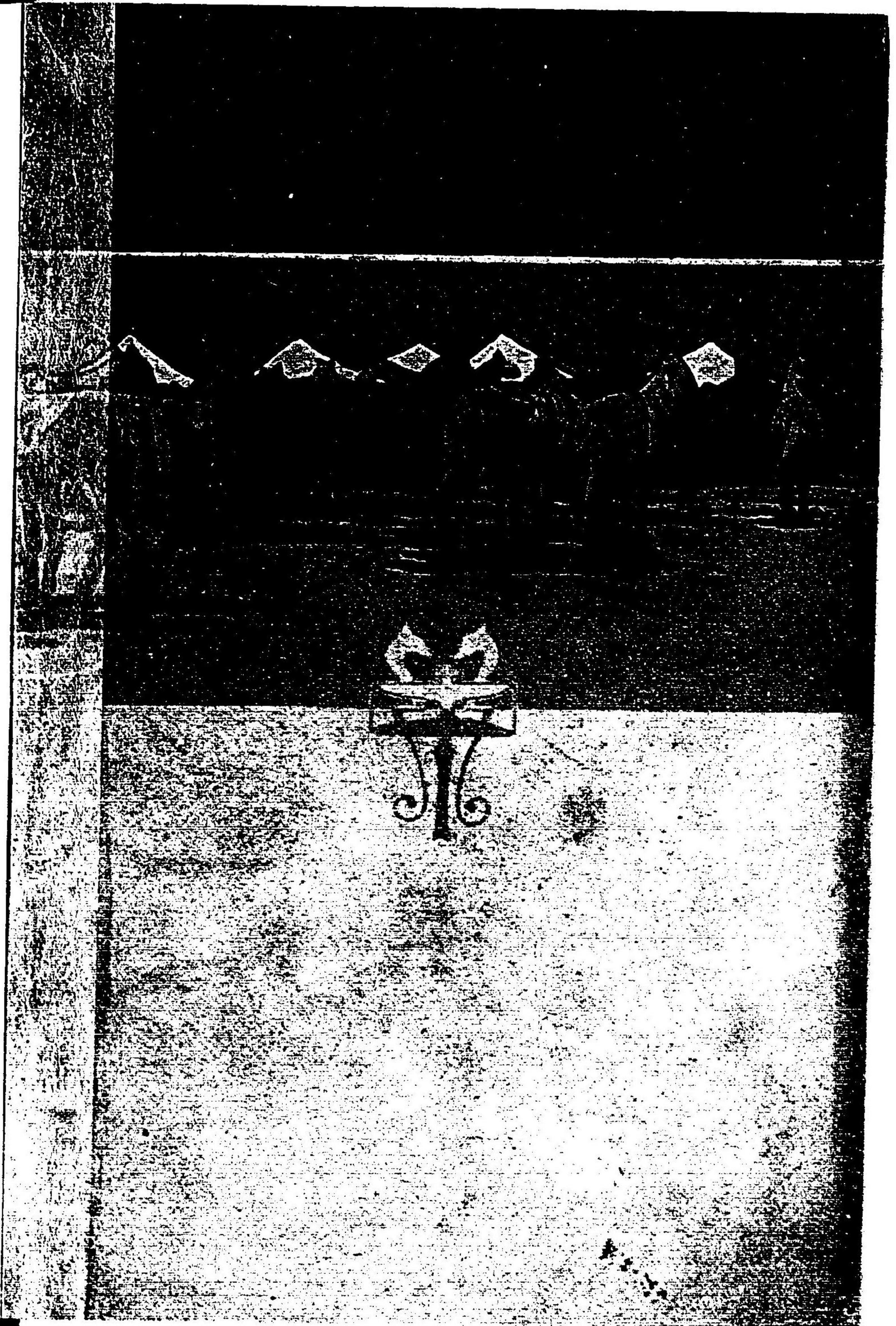
印 刷 所 東 京 市 神 田 區 松 下 町 十 番 地 橫 田 活 版 所



賣 捌 所 各 府 縣 特 約 販 賣 所







1

特 22

125

陣中の友

国立国会図書館

002749-000-2

特22-125

陣中の友

智葉女史/著

M38

ACB-6215

